第１分散会

ファシリテーター　　中尾　茂樹
分 散 会 記 録 者　　幸島　恭輔

未来応援コミュニティ　b-room ぶるーむ

未来応援コミュニティ　b-room ぶるーむ　　佐藤　淳子

「家庭でもない学校でもない第３の居場所」として、高校生が安心して過ごせる居場所づくりを目指して活動している。地域の仏壇店から無償で貸りた駅通りにあるテナントを、高校生が放課後に気軽に立ち寄れる場所として開放している。地域のアンテナショップとしても活用している。読み聞かせ講師、助産師、ママ友など、６人の仲間たちが活動している。安心して過ごすことのできる「居場所」、ボランティア、体験、講座の企画運営などの「活動」、高校生が自主的に活動する「主体性」を大切にして活動している。

ボランティア活動では、演劇ホールの会場準備、片付け、公民館主催「運動遊び」などの手伝いをしている。初めはなにをしていいのか分からなかったが、半年にわたる活動の中で、考えながら動けるようになってきた。祭りの時期には、一週間毎日ごみ拾いをした。保存会の本部に掃除道具を置いて、放課後など、できる時間に、できる場所で活動できるように工夫した。他にも、小学校へ行きスポーツ鬼ごっこを教えたり、市議会議員との意見交換会に出席したり、地域にある手つかずの荒れた公園の活用を考えたりして、高校生の主体性を生かして幅広く活動している。

高校生が元々持っている力を発揮できるよう、エンパワメントしていくこと、地域との関わりの中で第３の居場所が自分でつくれることを大切にして、高校生がもっと地域で輝けるように活動を続けていきたい。

三芳祝太鼓保存会

三芳祝太鼓保存会　　安藤　記代（西条市）

三芳祝太鼓保存会は、現在、三芳小学校・庄内小学校の児童 10 名で活動している。昭和 60 年に、「三芳わらべ歌グループ」が発足した。当時はお手玉、あやとり、さるの木登りなどをしており、太鼓はなかった。1987 年に三芳小学校の落成記念として公民館とＰＴＡから太鼓４台が贈られて、太鼓の活動が始まった。商店街イベントや運動会、敬老会、秋祭りなどで演奏をしていた。1995 年に「三芳祝太鼓保存会」が活動を開始し、20 名程度が活動していた。サッカー日本代表の長友佑都選手も所属していた。

2002 年に保存会を引き継いだ。人数が増えてきて太鼓が足らなくなり、企業から助成をいただき、太鼓を増やすことができた。2006 年には活動が認められて、西条市文化協会から、芸術文化賞をいただいた。コロナ禍前には、福祉施設での演奏など、年間 20 回程度の出演をしていた。おおの山城大文字祭りや、成人式、ねんりんピック愛顔えひめ 2023 など、様々な場で演奏をしている。

現在は、毎週木曜日、16 時半から 18 時まで公民館で活動している。高学年が低学年に教えることで、受け継いでいる。子どもの減少や多忙化、指導者不足、コロナの影響による演奏機会の減少など、課題も抱えているが、これからも子どもたちと一緒にがんばっていきたい。

愛媛大学教職大学院中尾ゼミ

愛媛大学教職大学院中尾ゼミ　中尾　茂樹、神野　哲汰

中尾ゼミは今年度から始まった。一言で言うと、ワクワクドキドキを探究するゼミ。ゼミの研究テーマは「地域教育の推進」「防災教育の充実」などで、どれも「為すことによって学ぶ」ことが基盤になっている。

「閉校運動会サポートプロジェクト」では、閉校が決まっている小学校で、その学校最後の運動会をサポートした。活動の中で、運動会は地域との交流の場にもなっていることを感じた。

東日本大震災の現地視察研修では、「人に会う」ことを目的に、現地で研修を積んだ。これを基に、学校に出向いて、新しい非難訓練を提案した。校舎は丈夫で倒壊の可能性は低いこと、余震でパニックになってのけがが多いことなど、地震被害の現状を踏まえて、これまでの避難訓練を見直した。今の当たり前を見直して、命を守るために本当に必要なことを考えている。

地域教育と防災教育は社会づくりという意味で一緒。学校の子どもも、地域の人たちも助かるために、必然的で効果的な防災教育を進めていきたい。

【質疑応答】

＜未来応援コミュニティ　b-room ぷるーむ＞

Q　自分の周りで参加するかといえばしなさそう。どのように自分の思いを高校生に伝えていくのか。

A　ひとりよがりにならない。熱意をもって、活動がどのような意味があるのかを伝えていく。

Q　何人が活動しているのか。

A　一つの活動は 10 人くらい。全部でのべ 220 名が参加していて、毎週のようにいろいろな活動をしている。忙しいがやっているうちに次の企画が決まっていく。今も五つぐらいの活動が進行している。

Q　活動するための経費はどうしているのか。

A　プライベートでやっており、行政と関わっているわけではない。こども夢基金の助成金をいただいて活用しているものもある。地域企業のスポンサー、地域の方々の寄付などがある。いろいろなところを頼って活動している。

Q　どのような思いで活動を続けているのか。

A　求められること、必要なことだという信念を持ってやっている。高校生が置き去りにされている。すぐに結果が出ることではないが、５年後、10 年後に役に立つと思ってやっている。

Q　娘さんは母の活動をどう思っているのか。

A　初めは母が急にはじめてよく分からなかったが、行動力を見て、新しい人とのつながりがあって、そこに邁進している姿を尊敬している。

Q　公民館の一室に貸し部屋を借りて誰にでも来てもらってよい部屋を作っているが、なかなか来てくれない。高齢者の方ばかりになる。若い人に来てほしいと思っているのだが、最初のメンバーをどうやって集めていったのか。

A　興味をもった人が集まってきてくれている。声を掛けて集めるのではない。６人から増やそうということは考えていない。６人をメインにして、サポートする人をつくるようにしている。自分が何を

やりたいのかという思いをいろいろな人に伝えていくことが大切。規模は小さいままで、パートナーシップを広げていく。

Q　高校生は参加してどのような感想を持っているか。

A　部活の後にごみ拾いに参加した。ちょっとごみを拾っただけで感謝してもらえるのがうれしかった。

　スポーツ鬼ごっこを一緒にした。いろいろな小学生と関われて、出身校の子どもと関わって、楽しかったし、またやりたいと思った。

　公園プロジェクトに関わって、普段関わることのない大学生と関わることができて、できない体験ができて勉強になった。

＜三芳祝太鼓保存会＞

Q　私の地域でも獅子舞の保存会をしていて、地元の文化祭が 11 月にあって、獅子舞を舞ってもらった。町内の人たちに見てもらえてよかったと声があった。子どもたちが太鼓を始めるきっかけは。

A　仮入学をして、10 分ほど時間をもらってアピールする。友達を誘ってきたり、保護者が習わせたいと言って来てくれたりする。

Q　会の広め方として、小学生以外の参加はできるのか。

A　規約で小学生と決まっているが、考えている。ねんりんピックも２人出られなくなって、中学生に出演してもらった。卒業したらプロ集団に入っている子どももいる。部活などもあるのでいつもは頼めないが、頼れるメンバーがいる。

Q　指導は一人でしているのか。

A　一人でしている。６年生が１年生を教えるなど工夫して活動している。

Q　中学生が手伝ってくれることもあるのか。中学生にとっては地域に還元できる場にできるのではないか。

A　たまに来てくれる。いろいろな手を借りて活動していかないとできない。

Q　水曜日だったら活動しやすいかも。

A　習い事があるので、曜日を動かすのは難しい。

Q　学校の先生の関わりはないのか。

A　役員には入っていただいているが、特に関わりはない。

感　高校生を先生としてかかわってもらうと、お手伝いとしてではなく、指導者として活動してもらう。時間帯も夜にするなどすると層が広がるかもしれない。

感　教える人が中高生になるというのがよいかもしれない。

感　地域づくりではただのおばちゃんが大事。そういう人はいっぱいいるのではないか。そういう仲間を増やしていくとよい。

感　愛護班が盛んな地域だからこそ、手伝ってくれる人を探していくとよい。

感　鼓は、合わせる、協調性を学べる機会。もっとそのことを吹聴していってほしい。

感　学校のクラブ活動も一つの選択肢になるのではないか。

＜愛媛大学教職大学院中尾ゼミ＞

Q　避難訓練を実践するための、カリキュラムや設定はあるのか。

A　ＤＶＤなど、使ってもらえる教材がある。

Q　周りの先生方にも納得してもらって新しい非難訓練にしていくためには、どうしたらよいのか。

A　内閣府からの資料もあるので、そういう情報を提示していくとよいかもしれない。

感　シナリオのある避難訓練が学校に限らず、企業や公民館でも行われている。新しいあるべき非難訓練について考えることは大切だと思った。

感　学校のこれまでのやり方をいきなり変えるのはなかなか難しい。その点地域は変えやすいところも多いのではないか。できるところから少しずつ変えていくことが大切。

感　学校、地域をつなげるための手段として防災教育を考えていくべきなのではないか。

感　地域の人同士が顔見知りになり、声を掛けやすい雰囲気づくりをすることがまずは大切。そのために地域でできることを考えていくとよい。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　愛媛ではこのような集会をしてネットワークが生き続けている。つながれるネットワークができていることはとても素晴らしいことだと思う。

○　地域教育は、どうつなぐかがテーマになっている。基本に帰って、コミュニティを大切にしていきたい。16 回ではまだまだ結論はでない。これからも会を重ねていきたい。

第２分散会

ファシリテーター　今井　博志
分 散 会 記 録 者　二宮　啓

何かしたい！をカタチに　学んで輝くひと・まち塾～ボランティア発見講座～

公益財団法人　東広島市教育文化振興事業団　発表者　福永　崇志

大学生が市民と一緒になって、自ら積極的にボランティア活動に参加する、大学・行政との連携事業によるアクティブラーニングの講座である。実際に生涯学習ボランティアとして活動している市内の団体、活動実践者、支援団体等をゲストスピーカーとして迎え、様々なジャンルをオムニバス形式により講義・演習を行う。

大学生が、この地域におけるボランティア活動の役割と、これからの社会を担う若者としての役割を考え、一人の地域住民として、どのような活動が求められているのか、何ができるのかなど、地域活性化につなげるために、多様な視点から考察することができるようになることをねらいとしている。

-アイデアが動き出す-　西条をオモシロくするプレゼン大会！

SAIJO　SOUP 実行委員会　発表者　山下　真弘

スープを飲みながらまちづくりのプレゼンを聞いて語り合う、アメリカデトロイト発祥のイベント。国内２例目として愛媛県西条市で２０２０年に立ち上げ、これまでに５回開催し、多方面でのチャレンジジャー・プロジェクトが生まれた。

SAIJO　SOUP は、小さな「やってみたい」を表現する場と、誰かの「やってみたい」を応援・協力する場をつなぐことを目的に、実行委員会メンバーがボランティアで企画・運営している。イベントでは、投票権を購入した参加者がプレゼンテーションを聞き、一番応援したいと感じたアイデアに投票します。優勝プレゼンターには当日の投票権の売上総額がアイデア実現資金として贈られる。

高校はないけど高校生はいる町の高校生として、まちづくりに挑戦

一般社団法人　マツノイズムプロジェクト　発表者　井上　弘一朗

松野町は人口約３７００人の愛媛県で規模が一番小さな町である。松野町は「森の国」と呼ばれており、その名の通り、総面積のうち８４％が森林である。松野町は高知県との境に位置しており、旅人の多くがこの松野町で旅の疲れをとっていた。その名残として松丸街道がある。かつては宿屋や商店が立ち並んでいたが、今現在その賑わいは昔ほどではない。また、松野町にもかつて高校はあったが、現在では松野町に高校はない。それでも、高校生はいる。

「この町が５０年後、１００年後、果たして残っているのか。」私たちが「ふるさと」といえる場所を残すために、総合的に町の課題解決手段を高校生から考え、町の未来をプロデュースする。

【質疑応答】

＜何かしたい！をカタチに　学んで輝くひと・まち塾～ボランティア発見講座～＞

Ｑ　授業で何名来られ、準備期間はどのくらいですか。また、年間の利用者数は何名ですか。

Ａ　多い時は 100 名で準備期間は半年くらいです。

Ｑ　卒業された方は、その後どうしています。

Ａ　アフターフォローがあまりできていないことがあるが、裏方で携わってくれる方もいます。

Ｑ　ボランティア実習でのモチベーションを維持するための工夫はしていますか。

Ａ　常に情報発信を行っている。また、学生自身も心理面の勉強をしているので、モチベーションの維持に繋がっていると思う。

Ｑ　優しい英語とはどのような感じですか。

Ａ　文法ではなく単語で話ができるようにしています。

Ｑ　ボランティアは既存から新規までどのように取り組んでいますか。

Ａ　ボランティアコーディネーターと話し合いながら学生がしたいボランティアをマッチングさせています。

Ｑ　学生の気持ちの変容はありましたか。

Ａ　ボランティアを通じて出会うことがある。以前のボランティアが良かったのがきっかけでボランティア活動を継続している方がいた。

＜-アイデアが動き出す-　西条をオモシロくするプレゼン大会！＞

Ｑ　印象に残ったアイデアはありますか。

Ａ　恐竜レースの方やトゥクトゥクの方です。やると決めてから目の色を変えて頑張られていた。「西条市を元気にしたい。」という気持ちで行動されていた。第一歩ができたら、次に繋がると思えた。

Ｑ　SAIJO　SOUP ができたきっかけは何ですか。

Ａ　発起人の方（移住者）が西条市のためにしたいと思って行動してくださったのでできました。
そして、「自分のやりたい気持ちを告げられる場所があるいい。」という思いからできました。

Ｑ　西条ベースがありますが、そことは連携していますか。

Ａ　市民活動センターという組織があり、私たちも団体登録を行っており、他の登録団体と交流があります。５者協議を月に１度行っている。起業の相談や行い人と人を繋いでいます。みんなのやりたいことを実現できるように努力しています。

Ｑ　ハードルを下げて行動できるのがいいと思います。10 年を区切りで活動されるのですか。

Ａ　まずは、10 回を目指しています。自分たちで持続できる状態をつくってたいと思っています。

Ｑ　報道関係との連携はどのようになっていますか。

Ａ　ケーブテレビとつながっています。

＜高校はないけど高校生はいる町の高校生として、まちづくりに挑戦＞

Ｑ　メンバーが増えたらどうしますか。また、今後はどうしますか。

Ａ　私は卒業したら OB と関わっていきたい。そして、松野町に戻って来たいと思います。

感　感動しました。これをもとに松野町を全国的大きく宣伝してください。

Ｑ　メンバーの高校生はバラバラですか。

Ａ　３校に分かれています。そこで、自分ができる得意分野を生かして活動を行っています。

Ｑ　どうして地元に戻ってきたいと思ったのか。また、大人としてのしかけは何ですか。

Ａ　例えば、通学路の登下校時の交通指導が当たり前では無い。そういったことが積み重なって、地域に恩返しをしたいと思った。感謝の輪を広げていきたい。無理矢理残りたいと思うよりも自発的に戻

りたいと思えるようになりたい。

父：中学校と高校に経験していることが大切である。私が、地域の大人の方が一生懸命活動しているのを見てかっこいいと思っていた。そして、私も仕事をわくわくして仕事を行っています。私の姿を見て、面白い仕事をしているのだと感じていると思う。それを見ているから、「地元に戻ってきたい。」と思っていると思います。

Ｑ　新しい方へのつなぎ方はどのようにしていますか。

Ａ　募集は行っていません。イベントに来て、自分もしたいとメンバーに入ってくれます。

感　考え方が素晴らしいです。今後、リーダーとして何かやっていってもらいたいです。

Ａ　今後、自分がやりたいことをしていきたいです。そして、後輩に繋いでいきたいです。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　みなさんの発表が素晴らしかったです。

○　大人が子どもたちのためにいい舞台をつくってあげないといけないと思いました。

○　大人が子どものやりたいことをのびのびさせてあげたいと思いました。

第３分散会

ファシリテーター　　西川 浩司
分 散 会 記 録 者　西尾 祥之

世代をつなぐ公民館　夏休み「寺子屋プロジェクト」

島根県益田市 NPO 法人おむすび　発表者 大畑伸幸 氏（島根県）

子どもたちは、幼保小中高と成長するしたがって、通える範囲が拡がる。にもかかわらず、学校教育、家庭任せにすると、世界が拡がったのに大人に会えない。帰ってくる子も、帰ってきたあとに関わるロールモデルに会うことができない。循環をするためには、出会わないといけない、関わらないといけない。

“人が育つまち益田”では、対話と活動により、人と人を丁寧につないできた。丁寧にすると、案外早く結果が出る。学校外を豊かにすると中学校で花開く。高校魅力化をしなくても中学校でできると思う。とはいえ、人はつながりにくいので、単に会っただけではダメ。特に子どもと大人は丁寧に。

益田市では、益田版カタリバ、ミライツクルプログラム、つろうて子育て協議会などを実施してきた。これで公民館が変わった。子どもの活動をすると大人が寄ってくる。子どもを真ん中にする活動を実施し、平成 30 年には「世代をつなぐことが公民館の仕事」とした。

でも、つながるのは時間と手間がかかること。その中で、楽で効果的なのは、公民館寺子屋プロジェクトだった。丁寧につながろうと思っても、なかなか集まれない。そこで、子どもが集まりやすい夏休みに、公民館を一つのプラットフォームにして活動を実施した。川遊び、アナウンサー教室、公民館ツアー、小さい学校の広域交流など。社会教育コーディネーターは、学校外の活動も充実させることができる。

寺子屋は 14 日、プロジェクトが 30 個で、ほとんど毎日何か活動がある。それによって、子どもたちの活動が拡がる。20 の公民館全てで実施しており、参加率は８割を超える、子どもたちが参加しやすい空間に、参加したくなる活動をつくることが大切。

子どもの育ちを支える地域の捉え方は、家庭があるから地域がある、という捉え方。決して学校があるから地域があるわけではない。地域の活動を豊かにすると、地域の一員だという想いが、生まれてくる。学校任せにしないというだけではなく、学校外に子どもたちの活動を増やしていくことが大切で、そこには多様な人との対話と出逢いと活動が必要である。入り口を大事に、活動のところまで進めるように取り組んでいくことを心がけている

高校生による無償学習支援活動と教員なり手不足解消への挑戦

松山聖陵高等学校特進コース　発表者 伊賀上 大三 氏（松山市）

松山聖陵高校では２つの取り組みがある。「土曜塾」と「教員養成講座」である。「土曜塾」は、高校生が地域の中学生に無償で学習支援を行うもので、4 年目を迎えている。目的は①地域社会への貢献：地域の中学生の学力向上②キャリア教育の一環：将来像の具体化である。

学習支援者は、特進コースの生徒・教員（1 回 5 名程度の教員が生徒をサポート）・愛媛大学の学生。12 の

中学校に案内した結果、参加中学生は 90 人。部活等で来られない人もいる中、平均 40 人程度が参加している。

生徒が、高校生の強みである勉強で人の役に立ち、勉強して良かったと感じることは、勉強に対して主体的に関わること、ひいては学力の向上やキャリア教育につながるのではないかという考えから始めた。また、地域という概念があまりない高校だが、コミュニティースクールの中で、高校も地域で、高校生も地域人材であるという意識を持っている。

高校生が否定的なことを言わず一緒に考える姿勢なので、支援した中学生の成績が上がり、「勉強嫌いなのに土曜塾は続けている」「とても良い時間を過ごしている」などの保護者評ももらっている。高校生自身も達成感を得たり、将来のイメージを持てたりしている。

今後に向けては、もっと勉強したい、学校に行きづらい、教室に入りにくい、配慮が必要、塾に通いたくても通えない、学校に足が向きにくい生徒さんを支えるようにも考えている。勉強したいという気持ちさえもっていれば、誰でも受け入れていきたい。

「教員養成講座」は、将来先生になりたいと考えている高校生に対し、多彩なフィールドワークなどを通して教職への適性を見極め、その素質・能力を育成する取り組み。目的は、①生徒の勉強、②地域貢献、③キャリア意識の醸成、④教員のなり手不足の解消である。実施にあたっては、win-win の関係を大事に、受け入れ側に負担を感じさせないように考えている。例えば、宿題の丸付け、水泳の手伝い、登校の見守りや保育園での読み聞かせなど、学校からの要望も大切にしている。

月に 1 回実施している小学校支援活動を通して、将来先生になりたいが、小中高校の選択を決めかねている生徒が小学校の先生になることを決めたという事例も出てきている。

江戸時代から三間と吉田を繋いできた峠を復活する活動

十本松峠の整備と復活の会　発表者　浪口　長正　氏（宇和島市）

76 歳をはじめ、90 代のメンバーで活動をしている。

もともと吉田藩の年貢米を運ぶのにできた十本松峠は、時代とともに荒れ果てていたが、地元の毛利家（庄屋）の保存会に協力を依頼して、活動を始めた。最初は所有者の特定と説得からスタートした。

昔、自分たちが遠足などで行った時の思い出のように、また子どもたちの遠足ができるようにという思いで活動してきた。三間町は海に面していないので、生まれて初めて峠に上がって海を見るということがある。荒れ果てていた峠から、海が見えるようになってとても感動した。

保存活動で峠を通れるようになってからは、PTA でも登ったり、高校生が PR のために制作した動画がコンテストで優勝をしたり、地元の人を中心に様々な人に関わってもらいながら取り組みを継続している。切った檜は椅子として活用もしている。4 月 13 日にはツツジの鑑賞会を予定している。高齢化と人口減少が続いているが、何とかこれからもやっていきたい。

【質疑応答】

＜世代をつなぐ公民館　夏休み「寺子屋プロジェクト」＞

Q　自治会の加入率は？

A　８割であり高い。しかしそれだけでは足りない、新たな活動が必要。

Q　同じ人がやり続けてしまうことが多いが、巻き込む方法や発掘の仕方は、どのように？

A　子どもたちの活動といえば、人が OK してくれやすい。義理と人情。来たあとで、やって良かったと思ってもらえるかが大事。また、専門性を持たないといけない。公民館は税金で作って運営されている。そこに人が来ないとちゃんとしようと思うな。６割くらいの思いつきでチャレンジを。140 万を、５万単位、10 万単位、20 万単位など、やりやすいように小さい、活動しやすい、義務や大きい行事を行っているようであれば、入りたくないと思う。

Q　既存の予算を減らして、子どものものに回すのは大変ではなかったか？

A　力のある公民館２、３館の館長の根回しを行った。

Q　体系化されているのがいい。地域ごとに発信しているが、まとまってるのがいい。つながりを意図してつくっていると思うが、ストーリーは？

A　小さいところは公民館が中心となって実施している。やってみると子どもたちが楽しく行う。教えなくても、好きでやっていることは上手。簡単に 20 グループなんてできる。子どもたちを集まるのは、行政。教えてくれるのは地域の人。地域の人の力があるのに、使い切れていないということがある。

Q　何をやるかが大人が考える。結局、親が考えている。子どもの意見を取り入れたいが、どうすればいいか。

A　その気になって楽しめれば、子どもが寄ってくる。いつもよりも楽しそうにやること。何もないところで、アクティビティーをしてごはんを食べて解散する。をやっていた。しかし最初は遊ばない。４回ぐらいすると遊び出す。子どもたちが自分のやりたいを言うまで、時間がかかる。学校でやりたいことを言うまでは時間がかかる。子どもたちには、知識や経験が少ないので、意図的に経験を積ませて、その上で、やりたいを引き出す仕組みがいる。

　強制的ではないが、上手に仕込むことが必要。先生や学校や親がやることを決めている。個々の手間は丁寧に、子どもたちがその気になるように、意図的に組まないといけない。地域の力で、機会だけはたくさんつくる。家庭の格差が影響するので、その格差を少なくしていきたい。

＜高校生による無償学習支援活動と教員なり手不足解消への挑戦＞

Q　土曜塾の場所は？

A　校内。参加者に高校に来てもらって実施している。

Q　土曜塾について、小学生中学生に来てもらう工夫は？

A　中学校にチラシ配布を依頼しているのみ。なお、参加のきっかけを４つの選択肢（親、自分、友だち、学校の先生）で訊いたところ、45 人中学校の先生は１人だった。私立と公立の関係等では難しいこともある。

Q　生徒に対して、いろいろとレクチャーしているか？

A　１年目はしたが、その後はしていない。何かあってはいけないので、教員の当番制で見守っているが、生徒の主体性が全て。教えることで自分の勉強になる。

Q　土曜塾について、民間の塾から何か言われないか？民業圧迫という話にならないか？

Ａ　皆無だった。
Ｑ　労務管理の面で、先生の業務改善としてはどう考えているか？
Ａ　土曜塾は、土曜授業と組み合わせて、毎月隔週土曜日に実施。13 人の教員の輪番制で、経費もそれなりに確保して行っている。
Ｑ　学校の経営方針なのか、先生の情熱でやれているのか。
Ａ　授業数を減らして実施。元々の１日９時間授業を、８時間、７時間と減らして取り組んでいる。

＜江戸時代から三間と吉田を繋いできた峠を復活する活動＞

Ｑ　取り組みに至ったモチベーションは？
Ａ　学校卒業後、人生で苦しい時に、あの頃友だちと遊んだ十本松峠はどうなっているか考えることがあった。70 歳になって何かできないかと考えた時、十本松峠を後生に残すことを考えた。
Ｑ　全長は？
Ａ　４キロ。
Ｑ　整備は大変だったのではないか。
Ａ　３年間はほとんど山に上がってきた。今は通れるようになったので、午前中涼しい時に行って整備を続けている。
Ｑ　お金がかかるし、人手もいると思う、どうしているか？
Ａ　企業が出している助成金を活用している。あとは自己資金（自腹）での活動。
Ｑ　継続が最もネックになるのではないか。できるところとできないところがあると思うが、今後どうしていこうと考えているのか？
Ａ　高校も全部まわったが、北宇和高校三間分校以外はダメだった。「歴史に興味がある生徒がいない」とも言われた。非常に難しい。山は、２・３年したらすぐに元に戻るので、頻繁に手を入れないといけない。今年度は猪の害もあった。皆が携わらなければ元に戻ってしまうと思う。
感　走る楽しみを仕掛けると、後生につながるのではないか。
感　高校生が説明できるようになるなど、循環のサイクルをつくらないといけない。
感　歴史の話ではなく、いろんな見方や切り口で十本松峠のことを地域教育の場として、巻き込んでいければいいのではないか。

＜全体を通しての意見感想等＞

・誰を巻き込んでつないでいこうかと考えている。高校生の体験もやっているので、誰にバトンを渡していくか、うまくやる必要はないというヒントを今日もらった。引き継ぐときに、失敗してもいい、とりあえずやってみることを伝えられる。成功とかうまくいくことありきでやらなくても良いと思う。
・良いなと思ったらやる、というアクションをして、振り返るということを繰り返すことがよい。
・楽しみながらしなければいけないし、知らない人を招く、身内だけを辞めるなどをして、いろんな人がパブリックに来るようにしないといけない。
・時間がかかるけれど有効なのは、小学生の頃から、教育ではなくて体験学習をすること。自分の小さい頃に行ってきたことは印象にも残る。長期的になるが、体験という学習をしていけばいいのではな

いか。
・始めてしまうと、自分がしないといけない。という使命感が出てくる。そういうときに仲間で回していけるようになるといいと思う。
・頼っていくこと。自分だけでやろうとしないことが大事。
・後継者問題と考えた時に、障害がある人がやりたいとなっても止められる。障害のある人が関わることのできるようにするのも良いのではないか。
・幼保は民間、小中は市町村、高校は県など、設置者が違うので、そのベースを見ると連携が難しいことが分かる。学校と言ってもなかなか連携は難しいので、学校外の活動を充実させていくことが大事。
・小さいこと、楽しいことを、win-win の関係でたくさん創っていくことが必要。

第４分散会

ファシリテーター　　本多　正彦
分 散 会 記 録 者　　岡本　和也

「ふらっとKOKUFU」における防災学習を通した地域貢献活動

国府中学校防災学習倶楽部　　発表者　中山　直之

創立３年目で、現在は30名ほどが在籍している。他の部活との兼部を認め、参加できるときに参加するという形を取っているため、実質活動メンバーは 10 名前後である。防災学習を通して地域とつながり、国府町の明るい未来を切り拓くことを目的に活動をしている。地域の施設「ふらっとKOKUFU」を拠点とし、イベント時には防災クイズや防災スタンプラリーを開催し、参加者から好評を得ている。その他にも被災体験１泊研修や水災害対策フィールドワーク、子ども食堂のお手伝いなどを行い、地域の方と交流することで、生徒は大きく成長することができている。どの活動も生徒が主体的に取り組んでいる。また、防災学習を通して、災害のことだけでなく、福祉・人権・まちづくり・未来づくりについても学ぶことができている。

伊予市に伝わる民話を紙芝居と手話でＤＶＤ化

伊予市「咲む」を観る会実行委員会　　発表者　阿部　美紀

手話サークルでは、手話の勉強だけではなく、コミュニケーション・ボードの作成や地域の方に聞こえないことを体験してもらうなど、様々な活動に取り組んでいる。２年前に、ろうの女性が限界集落の村おこしに奮闘する映画「咲む」を上映したところ、264 名の方が集まり、予想以上の収益が出た。その収益を社会貢献に活用したいという願いから、表現豊かな手話の魅力や、障害の有無に関係なく得意分野で協力し合う大切さを伝えるために、伊予市に伝わる民話を手話と紙芝居、語りで楽しむことができるＤＶＤを制作した。手話での語りと紙芝居の作成をろう者が、声での語りを読み語りボランティアが担当した。完成したＤＶＤは、市内の小中学校等へ寄贈するほか、インターネット動画投稿サイトでの配信を予定している。

モルックを通じた魅力ある地域づくり、町の活性化への活動

久万高原　山と森とモルック　　発表者　武山　智一

モルックを通して、久万高原町の活性化を目指して活動をしている。モルックは誰もが楽しめる、ユニバーサルかつバリアフリーなスポーツである。久万高原町は林業地でもあり、愛媛県で一番の高齢者率が高いという点からもモルックは適している。子どもからお年寄りまでがモルックを楽しみ、交流が生まれている。また、チャリティー大会を開催し、集まった資金で町内の小学校にモルックセットを寄贈したり、世界大会への遠征費として選手を支援したりしている。今後もモルックをきっかけに、みんなが笑顔になれる久万高原町にしていきたい。

【質疑応答】

＜「ふらっとKOKUFU」における防災学習を通した地域貢献活動＞

Q　公民館関係や自主防災等の組織はあると思うが、どの団体がリーダーとなっているのか。

A　国府中学校防災学習倶楽部がリーダーとなっている。国府中学校防災学習倶楽部と「ふらっとKOKUFU」が柱となって、他の団体も協力している。生徒が主体的に活動しているため、学校の先生が関与しなくても生徒が自主的に行動できるようになっている。

Q　先生はなぜ防災に取り組まれるようになったのか。

A　前任校での個別訪問を行っているときに、介護施設の方から利用者が災害の時に逃げることができないということを聞いた。生徒が「何とかしないと行けない」と呟いたことから、防災を学べば人権も学べるのではないかと思い、現在に至る。

Q　国府を好きになるということの利点は何か。

A　災害後に町を出て行く事象が多くある。防災学習を通して、地域を知り、地域の人とつながることで、災害が起きたとしても国府に残ったり戻ってきたりしてくれるのではないか。

感　広報はいろいろな手段を取ってきたが、これといったものはない。地道に広げていくしかないのでは。

＜伊予市に伝わる民話を紙芝居と手話でＤＶＤ化＞

Q　手話で民話を作ろうと思ったきっかけは何か。

A　伊予市が好きで、伊予市をもっと知ってもらいたいという思いから作成に取り組んだ。この映像をきっかけに伊予市のいろいろな場所に行ってもらいたいと思っている。

Q　制作をした中で、スタッフを集める中で苦労したことはあるか。

A　スタッフ募集は完全に口コミで集めた。実行委員会のメンバーが様々なジャンルの方だったため、いろいろな縁で集まった。

Q　次の目標、展望は何か。

A　手話に興味を持った方がいたら学校へ出向き、手話について知ってもらえる機会を作りたい。

Q　日本と外国では手話は違うのか。

A　国によって手話は全く違う。関西と関東でも違う手話がある。方言が違っても会話ができるように、多少手話に違いがあっても意味は通じる。

＜モルックを通じた魅力ある地域づくり、町の活性化への活動＞

Q　モルックで使われている道具は手作りしてもよいのか？

A　モルックの道具は輸入品しかない。日本になかなか入ってこないため、自作したのがスタート。しかし、商品名がスポーツのため、オリジナルで生産することはできない。当所は久万高原町で間伐木材を使ってモルックを作ろうと思ったが、できなくなったのが現状。今後、フィンランドの会社等と交渉していきたい。

Q　モルックを広めるために学校訪問をしているが、その時に必ず伝えていることはあるのか。

A　久万高原町内の学校は少人数で、ほとんどが複式学級。休み時間に遊ぶにしても、大人数で遊ぶ機会がない。低学年から高学年で遊べるモルックをみんなで楽しんで欲しいという思いでいる。小さな久万高原町でも世界大会に出ることができるということを伝えている。

感　公民館でも高齢者を対象に様々なスポーツを提供している。足腰が弱ったお年寄りが増えたため、クロッケーのチーム数が減っている。そのため、ボッチャやモルックの導入を検討したが道具の関係

でボッチャを選択した。今後はモルックを導入したい。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　貴重な話を聞けて良かった。今後、タイで野球を教えることになっている。スポーツと何かというような形のものを創造し、タイでの活動に生かしていきたい。

○　心地よい時間を過ごすことができた。

○　子どもたちに本物を体験させるということの大切さを感じた。

○　地域でのいろいろな活動の中心には子どもがいて、次の地域の担い手になる子どもたちにいろいろな体験を提供したい。

○　このような場に来たのは初めてだったが、とても充実した時間となった。

○　今後は主体的に行動し、よりよい活動にしていきたいと思った。

○　今回の出会いを大切に、今後の活動に生かしていきたい。

○　地域と子どもと保護者との関わりができる場を自分の得意を生かして作っていきたい。

○　どなたも行動力が素晴らしかった。子どもに対する愛情を持って取り組んでいきたい。

○　楽しい時間を過ごせた。

○　とても勉強になる時間となった。

第５分散会

ファシリテーター　　武智　理恵
分 散 会 記 録 者　　西村　隆信

あおば未来プロジェクト

あおばコミュニティ・テラス　発表者　木村　壮

「小学生時代友達０，成績もイマイチ。そして、いじめらる。」この経験から、「身の回りの人には笑っていてほしい。」という考えを持つ。また、この考えが世界に広がってほしいという思いから、中学生時代に「市ケ尾ユースプロジェクト」に参加し、小学６年生を対象に道徳の授業でいじめについて深く考える事業を実施してきた。現在、大学生となり、あおばコミュニティ・テラスで様々な活動のサポートを行っている。将来は数学の教師を目指している。あおばコミュニティ・テラスとは、学校とも家庭とも違うコミュニティで、小学生から大人まで幅広い方が訪れ、友達と勉強をしたり、悩みを相談したりすることができる場である。

また、この場所は、中高生が主体となって青葉区の課題を解決していく、「あおば未来プロジェクト」の活動拠点にもなっている。大学生は、このプロジェクトのサポートを行っている。中高生は、このプロジェクトを通して、自分の頑張りで街を変えられるというワクワク感と充実感を得ることができ、大学生はサポートを通して、悩みながら、中高生から刺激を受けながら、街の温かさを感じながら成長していくことができている。これからも、SDGｓの理念にもなっている、「誰一人取り残さない」という精神で、この活動に取り組んでいきたい。

フラピクニック　in 五色浜

フラピクニック実行委員会　発表者　杉浦　未季・川口和代

ハワイを感じさせる美しい五色浜。「フラダンスを通して、人々がつながり、いつか五色浜がフラの聖地と言われるようになれたら」という思いから 2015 年よりスタートした「フラピクニック　in　五色浜」。フラダンスを愛する人が垣根なく、美しい野外で芝生の上でフラダンスを行っている。そんな思いが全国に広がり、今年度は、１万人以上の方が来場するようになった。

最初は、フラをしたいという友達のために、自分たちだけで始めた活動であったが、現在は市がこの活動に積極的に協力してくれるようになり、また、フラダンスチームが小学校に出前授業に行くようになり、市全体を巻きこんだ取り組みとなっている。ゆくゆくは地元の高校にフラダンス部をつくることも計画している。そして、このフラダンス・フラピクニックが伊予市の代名詞となり、地元を愛し、自慢できる子供の育成を願って、活動を続けている。

住んでいてよかったと思えるまちづくり

特定非営利活動法人 U.grandma Japan 松島 陽子

平成 30 年７月豪雨災害後に「今私たちにできること」はないかという思いから立ち上げた団体である。宇和島市からの依頼があって立ち上げたという経緯もあり、行政との連携が大変うまくいっており、協力を得ながら活動を行っている。また、最初は被災された方へ弁当を届けるという活動がメインの活動であったが、現在は、子どもの見守り、孤独孤立への支援、女性防災リーダーの育成等の活動を行っている。その中でも、人材育成に重きを置いており、子どもたちを対象にした防災学習を行ったり、様々な団体に所属している女性を対象にした防災リーダー研修会を行ったりしている。また、子どもをはじめみんなが利用できる食堂では障がい者施設やひとり親家庭との関りもあり理解を深める場ともなっている。

設立から５年が経ち、活動の内容は変化してきたが、地域の課題を見つけ、その都度必要な活動をすることで人に寄り添い、自分たちにできることを考え活動している。

【質疑応答】

＜あおばコミュニティ・テラス＞

Q　小学生への道徳の授業では自分の体験談をしたのか？

A　このプロジェクトを行っていたチームの中には、いじめたことのある人といじめられたことのある人がおり、双方の話を取り入れた授業を行った。現実の話として、子どもたちが話をしっかり聞いてくれたと感じた。

Q　授業をしてみての結果はどうだったのか？

A　小学生への授業前後のアンケートからは、いじめについて深く考えるきっかけになった、いじめは意識していないところでもやってしまっていることに気が付いたので、気を付けていきたいというような意見があり、意識改革できた部分もあったと感じた。

Q　あおばコミュニティ・テラスに参加するきっかけや７年間も続けてきたのはなぜか？

A　未来プロジェクトに参加したのは、いじめの授業をしてくれた先生のように、皆にいじめについて深く考えてもらって、無くしていきたいと思ったから。続いているのは、自分の成長は先輩たちのおかげで、それと同じ役割を後輩にしていきたいから。

Q　子どもたちは街の課題に気が付くことはとても難しいと思うが、どのようにしているのか。また、具体的にどのような課題が出るのか。

A　課題意識をもって参加している子もいるが、そうでない子に対しては、制限時間を作って、質より量という考えで、どんどん課題を書かせていく。そうすると、いろいろと出る。その中で出た意見としては、「通学路に街灯が少ない」、「特産品が少ない」、「異文化の受付が足りてない」などが出た。

Q　中高生と関わる際に、気を付けていることはあるか。

A　まずは仲良くなることを心掛けている。そのためにスポーツ、カードゲームなどをして一緒に遊ぶようにしている。仲良くなることで、話しやすくなり、プロジェクトについても考えやすくなる。

感　数学の教員として、勤めているが、今日の発表ができる木村さんを見て、素晴らしい先生になってくれると感じた。期待している。

感　地域に出ていくことの重要性を大変感じている。先生と生徒は教える教えられるという関係。地域に出ていくことで、楽しみながら学ぶことができる。

感　あおばコミュニティ・テラスのような、高校生が大学生と繋がる環境が愛媛にもあったらよい。

＜フラピクニック実行委員会＞

Ｑ　どうしてフラダンスだったのか？

Ａ　たまたま。みんなでやってとても楽しいから。

Ｑ　どのようにスタートしたのか。

Ａ　９月実施で、思いついたのが７月だったため、最初は５チームだけの参加だった。また、20 万円かかり、継続していくことが難しいと感じ、企業等にお願いして、継続的に実施できるようになっている。

Ｑ　フラピクニックには、どのようなチームが来るのか。

Ａ　コロナ禍では、県内限定にしたが、徳島、東京、広島など、全国から来る。

Ｑ　とても大きなイベントだが、これまでに問題などはなかったか。

Ａ　昔は、フラの音楽を騒音としてとらえられていた。それからは、近所にチラシをポストに入れるなどして、事前にお知らせするようにしている。現在は好意的で、受け入れられている。

Ｑ　参加者数が多くなったことで、問題はなかったのか。

Ａ　無料なので、基本的には自己責任で実施している。ダンサーさんたちだけはこちらで管理している。しかし、何かあってもいけないので、防災マニュアルを作成して実施している。

Ｑ　五色浜は誰でも使用することができるのか。簡単に使用許可が得られるのか。

Ａ　最初は否定的にとらえられて、なかなか許可をとることが難しかったが、現在は企業も市もとても好意的に協力いただけるようになっている。

Ｑ　フラダンスは身近ではなく、どちらかというかマニアックに感じている。ここからスポーツ、屋台、ヨガと広げていくことで、この取り組みがつながって、街の課題を解決していっているように感じる。そのようなに感じることはあるか？

Ａ　市と民間との距離が縮まった。市長の奥さんがフラダンスをしていて、そこから、市と行政がつながった。これからもやり続けていきたい。このイベントを通して、７人のリーダーが育っている。７人いることで、様々なアイデアが生まれてきている。

Ｑ　ボランティアを募集する際に心掛けていることはありますか。

Ａ　五色浜は本当に美しく、大好きだ。そして、夕日とフラダンスのシチュエーションがとても素晴らしく、踊り手も見る人も感動する。これを伝えるようにしている。

Ｑ　このチラシはボランティアが作成しているのか？

Ａ　これもボランティアで、専門学生が作ってくれた。

感　舞台ではなく、芝生の上で実施しているのが大変素晴らしく感じた。

＜特定非営利活動法人 U.grandma Japan＞

Ｑ　それぞれの活動に付けられた名前（ぱくパーク、食員室等）は誰が考えているのか。

Ａ　やりたいとを伝えると、そのイメージを言葉に変えてくれる人がいる。現在は、そういった人材をどんどん増やしていっている。

Ｑ　東日本大震災の際に、障害者の方が健常者と比べて、情報量が少なく、より困難な状況になったと聞いたが、そういった方へどのようにアプローチしたり、つながりを持ったりしているのか。

Ａ　障害施設に弁当を届けることがある。子どもたちが施設の方と関わることで、一緒に何ができるのかを考えるようにしている。知識としてあっても、実際になにができるのか分からない。一緒に体験、生活することでわかることがある。

Ｑ　どうしてこの活動をするようになったのか。

Ａ　４人の子どもが学生の際に、ＰＴＡ活動に取り組み、子どもが笑顔になることを中心として活動してきた。そのような時に、防災キャンプをした。その辛さを経験したことで、災害が起きた時に何かしたいという思いが出てきた。また、活動していく中で、様々な方が支援してくれる。その思いにも報いていきたいという考えで続けている。

Ｑ　中学生がどのようにして、子ども食堂にボランティアとして来るようになったのか。

Ａ　宇和島はコミュニティスクールが進んでおり、学校からの願いを地域とつなげることができる環境がある。学校から生徒にボランティアをさせたいという思いを子ども食堂へのボランティアに繋げた。

感　自分の勤務する中学校の校区は３４．４パーセントが高齢者である。災害時に一人でも多くの命を救うために、授業の中で、土砂災害の防災学習を行っており、どこに誰が住んでいるのかを知るきっかけになるような活動をしている。今日の話の中で、防災イベントではあるが、楽しみながら学習できる活動が多かったので、学校にも取り入れていきたい。

感　中学生だからこそできる地域復興、人助けがあるので、今日学んだヒントをもとに、楽しみながらできる活動に取り組みをしていきたい。

＜全体を通しての意見感想等＞

感　新居浜で、防災関係のことをしている。小学校対象に防災キャンプをしたが、何か物足りないと感じ、中学生を巻き込む必要を感じた。中学校にお願いして、色々なプロジェクトを３年間実施してきた。今回素晴らしいアイデアを頂いたので、「つなぐ」、「つながる」ことを大切にしながら、実施していきたい。

感　今日の話を聞いて、様々な活動が、能動的に動く子の育成に繋がってきているように感じた。

感　将来、子どもが地域の担い手となるためには、地域に入っていって成長していくことが大切だと思う。この思いを他の教職員にも理解してもらえるようにしたい。

感　地域側が学校をどう捉え、どう活用していくのかを考えることも大切である。

第６分散会

ファシリテーター　　水野　浩司
分 散 会 記 録 者　　八木　正汰

府中市独自でフォーラム開催。学校と地域の連携体制構築推進

広島県府中市教育委員会　発表者　津田　典和・奥村　圭太

広島県府中市は１年生から９年生までの９年間を見据えた小中一貫教育、学校・家庭・地域が一体となったコミュニティスクール（以下ＣＳ）、この２本の大きな柱を教育政策として取組を進めている。学校数は全 10 校 2,280 人と年々減少しているが、全校にＣＳを導入し、地域とともにある学校づくり、学校を核とした地域づくりを推進している。

～ＣＳ設置の背景～

「子どもたちのためのＣＳ」を原点に以下の４つの視点を重要視している。

・地域を学ぶ
・地域を生かす
・地域に貢献する
・地域と学ぶ

次に右図の騎馬レースの模様を例に府中市が目指すＣＳの形を２点挙げた。

・学校、家庭、地域が同じ方向を向いている
・高さをそろえる（片一方だけが頑張って規模が崩れてはいけない）

地域と学校が連携することで地域の方も当事者意識を持ち、学校や地域をもっと良くするためにＣＳに参画していくことを目指す。

また、中学３年生（義務教育学校９年生）になり、今度は地域の方を支えるために子どもたちが騎馬を組み、当事者意識を持って地域に貢献しようとする意識が芽生えることは、大人や地域が育つことにつながる。

設置まで２年間の準備期間を要し、発足には新しいことによる不安の声も上がったが、次第に何ができるかを考え、まずはやってみるという前向きな気持ちで準備に臨んだ。

～９年間を見通した「地域協創カリキュラム」～

学校では生活科・総合的な学習の時間を核に、キャリア教育の視点をもって「地域協創カリキュラム」を実施している。地域や産業界と共に「社会に開かれた教育課程」の実現を目指しており、全ての学年で地域・保護者・産業界の方々と育てたい資質能力を共有して取組を推進している。特に８年生では模擬会社ＬｉｎｋＳを立ち上げ、生徒が主体となって会社経営をしている取組がある。ここでは企業支援チームとして地域の社長等をしている方から様々な指導・助言を貰いながら取り組んでいる。「失敗をさせないとダメ」「時間はたくさんかけても良い」といった第一線で活躍している方々からのアツいサポートの下、府中市の木材を使用したお箸や和紙を用いたランプなど商品の開発・販売をしている。

～共有と実感　府中市ＣＳフォーラム 2023～

学校での取組が進む一方で、府中市全体のアンケートでは共有性に課題が見られた。そこで、取組そのものを地域に共有・実感させる目的でフォーラムが開催された。教員や保護者、地域の方など、日常では交流する機会が中々とれない立場同士が意見を交換し合うことで、地域全体に活動を浸透させた。さらに、ＣＳカフェ（地域の方の集える場）の設置やこどもＣＳ委員会といった活動を広く周知していくことで課題や解決策に対して地域全体で寄り添う形で共有を図っている。

“いこるところに人は集まる”府中市教育委員会は、起こしたＣＳ発足の火を地域全体で盛り上げ、子どもたちだけではなく関わる大人も共に成長できるコミュニティ・スクールを目指して取り組んでいく。

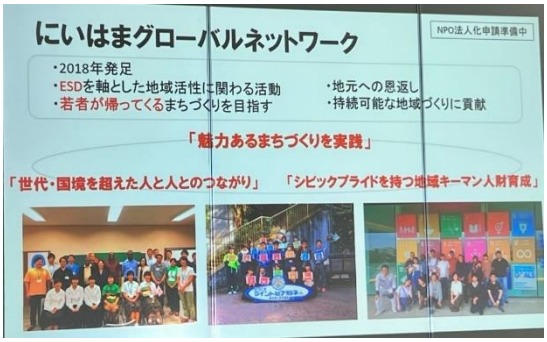
若者による ESD の実践、市民参加型の持続可能な新居浜をめざす

にいはまグローバルネットワーク　発表者　小松　柊成

にいはまグローバルネットワークは、自分たちが生まれ育った町に、お世話になった方々に恩返しがしたい！という若者達の思いから 2018 年に発足。発足以来はＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）を主軸とした活動や取組を行っている。

～市外へ飛び出す若者が帰ってくるまちづくりへ～

新居浜市には大学がないため高校卒業して進学する場合は外へ出ることがほとんどである。そこで、大学で学んだことを持ち帰ってくれるように、若者が帰ってきてくれるまちづくりを目指している。そのためには、多文化共生の時代ニーズに合わせて国境を越えた人と人とのつながりや学びを深めていくことや、活動を通してシビックプライド（郷土愛）を持つ地域キーマン人材育成を実践している。



2018 年に発足してからはモザンビーク復旧支援のための募金活動や、国際交流の講演、福島県南相馬市における防災減災の取組や各種講演会など活動は多岐にわたる。また、外国人も対象に地域の防災減災社会づくりや毎年２月に開催しているＥＳＤフォーラムの参加など、さらに活動の幅を広げた。

～新たな提案と継続開催を図った 2023 年～

2023 年はＡＢＣ（Akagane Be the Cange）分科会を新居浜市で提案。あかがねのまち新居浜が変化していくために、多様な分野での地域活性化を考え、みんなで手を取りあってチャレンジしていく考えを広めた。

また、2019 年から開催されているにいはまＳＤＧｓアートフェスティバルにおいて、第３回を迎える 2024 年は、にいはまグローバルネットワークが事務局を担って以前までの資材物品を駆使して開催する予定である。これまで実施してきた活動は、「やってみたい！」という気持ちを発信し、諦めずに続けていくことで、誰かが見てくれている・聞いてくれている・協力してくれる関係が生まれ、多くの人を巻き込んでいったことで成果を上げている。このような運動が新しい発見につながり、持続可能なまちづくりに発展していくと考えている。

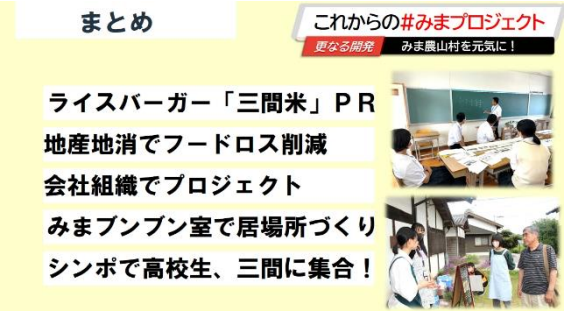
「＃みまプロジェクト」ライスバーガーで地域の課題解決！

愛媛県立北宇和高等学校三間分校　地域情報ビジネス部
発表者　猿谷めぐみ・早川海奈・和田明莉・和田恋羽

愛媛県の南予に位置する三間町。タケノコやお米の産地でもあり、お米は「みま米」として知られている。近年、人口減少が課題であり、三間分校は令和８年度には閉校の可能性があると発表されている。そこで「みまプロジェクト」を立ち上げ、地域とともに町の課題解決を目指した。解決の際は、ＳＤＧｓの観点も取り入れることで自然を守りながら、住み続けられるまちづくりに挑戦した。

～ライスバーガーで地域を元気に！～

ライスバーガーは特産品であるみま米とタケノコや大葉を用いたソースなど、地元産をふんだんに使用している。また、使用する分のみ収穫したり収穫した日に調理し長期保存を可能にしたりと、フードロスにも貢献している。 ライスバーガーは商店街でのマルシェや文化祭、地域づくり推進事業所の出店など計 10 のイベントで約 970 個（三間町民数で換算すると７人に１人が購入している）販売した。



活動の様子は地元広報誌やＦＭ愛媛等、多くのメディアに取り上げられ、みまプロジェクトの認知度向上につながっている。

～ビジネスインターンシップの実施～

地元の生産者や商店の要望を聞き、高校生が実際に体験することで仕事内容や地域課題の実情の把握につなげている。また、ライスバーガー開発に協力いただいたホテルの清掃やセレクトショップでの発送準備など幅広く活動している。さらに、青少年市民共同センター事業を活用して年間６回のクリエイティブカリキュラムに参加している。

～憩いの場　サードプレイス作り～

子どもと大人が和らげる憩いの場を目指して、地域と学生が共同するサードプレイスづくりに取り組んだ。舞台となったのは三間町の農家古民家。三間分校と分室を掛け合わせた「みまブンブン室」を構築し、宿泊施設やカフェとして開設していくことで、地域の方と学生が共に集まり、活動できる場づくりを目指している。ブンブン室の箱づくりでは名城大学建築学部、八幡浜工業高校と協力して作成し、県域学生間交流も含めて準備を進めている。

～県境を越えた高校生シンポジウムの開催！？～

三間町に南予・高知の学校を招き、予土線圏域活性化のシンポジウムを実施予定。これまでの経験を基にイベント開催による経済波及効果についての検証や、予土線のハロウィン特別車両の運行を通して、観光需要の増加と予土線圏域の活性化の重要性を唱えた。

「みまプロジェクト」から始まった活動は県域の活性化まで規模を広げている。今後はみまブンブン室を拠点に地域課題の解決に向けてコーディネートしていく。

【質疑応答】

＜広島県府中市教育委員会＞

Ｑ　ＣＳ発足にあたって苦労したことは

Ａ　ＣＳの存在の周知。講演会を通じて広げた。認知を広げた後の動き出し。ＣＳの様子を教職員に見てもらったりすることで、地域の貢献度を認知してもらえる。地域全体で働き方改革をしていこうという雰囲気に肩を押されたのではないか。

Ｑ　Ｌｉｎｋｓについて。企業支援チームに協力いただけるまでの経緯について

Ａ　企業に直接経緯を伝えることで支援いただいた。

Ｑ　高校や大学ではＣＳの仕組みを活用し、どのような取組を行っているのか。

Ａ　地域のために目的を持った取組をしてほしいという思いがあるが、現在具体的な取組は検討している。

＜にいはまグローバルネットワーク＞

Ｑ　地域に恩返ししたいと思ったきっかけは？

Ａ　学生時代、多岐にわたる活動に取り組むことができるよう配慮いただいた担当の先生のような人格を目指し、次の世代にバトンをつなぐために地域に恩返しにする形を取った。

Ｑ　役員の構成員

Ａ　４人の同級生、顧問は新居浜市の教育長が中心に活動している。市の教育委員会・生涯学習センターに協力いただいて参加者を募っている。

感　このふるさとに住み続けたい魅力あるまちづくりを目指し、ビジョンを持って地域活動に関わっている実践であった。

＜愛媛県立北宇和高等学校三間分校　地域情報ビジネス部＞

Ｑ　自分自身が地域の中に入って魅力を発信しようと思ったきっかけは？

Ａ　えひめ南予きずな博ＢＢＱソース甲子園の出場。当日は賞こそ取れなかったが、自分たちが作った物を広めていきたいと思うきっかけとなった。

Ｑ　先生方の部活に対する思い

Ａ　時間を割いている生徒のために力を貸そうという思い。現在３年生を中心に活動をしている。今後卒業しまた運営として戻ってこられる仕組みづくりに注力している。

Ｑ　卒業後の進路は？

Ａ　進学や地元での就職。学んだことを地元に還元することや、職場で三間町の事を広めていきたい。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　地域が取組に対して理解が早いと地域が元気になり、それが直接子ども達に伝わっていく。

○　交流から地域のよさに触れていると、将来子どもがやりたいことを見つけ、故郷を離れても、つながりを大切にできる。

○　「ワクワクする」が今回のテーマの１つ。まずは大人が元気に地元を楽しんでいるということが子どもに繋がり、そして未来の活動につながる。

第７分散会

ファシリテーター　　渡部　栄次郎
分 散 会 記 録 者　　井上　裕也

子どもと大人がワクワクを語り合う街に

一般社団法人未来のわくわく研究所　　発表者　武田悠平

本事業では子どもたちの「やってみたい！」という原動力をワクワクエンジンと呼び、それを引き出せるよう活動している。令和４年度には、宇和島市と共催し子どものやりたいことを応援するプログラムを実施した。「消防士になりたい！」「船を運転してみたい！」といった希望を建設業や保険業など様々な立場の大人が一緒に応援してかなえることができた。子どもたちがやりたいことを地域の大人たちが応援してくれることで子どもたちも心強かったと考えている。また、関わった大人から「すごい楽しかった」「また次回もやりたい」という声があったのが印象的だった。令和５年度には、高校生が地域の大人と一緒に実施した。実施するにあたり、高校の校長先生に何回もお願いをしたところ、「宇和島を変えるために頑張ろう」と熱意に応えてくれた。高校生や先生とつながりができたことは大きい成果である。また、今年度は子どもだけでなく商工会議所のメンバーを対象にしたうわじまルーキーズカレッジや未来のわくわく架橋事業で地域の大人たちへの研修を行った。この事業を受けた子どもたちが 10 年後 20 年後に「自分たちもやりたい」と思ってくれる仕組みや環境が継続していくことを目指して活動していく。

子どもの？を！に　～人生まるごと自由研究～

社会教育士すぎなみの会 発表者　山口京子

コロナ前には、サイエンスフェスタやワークショップ・理科教室などをしていたが、これらがコロナでできなくなった。そこで「杉並サイエンスコミュニケーション」という広報誌を作り始めた。杉並区は自由研究にとても力を入れており、杉並子どもサイエンスグランプリという賞を 56 年ほど実施している。その中で優秀賞を受賞した児童にインタビューをして、記事にしたところ、評判となった。受賞者の記事で評判が高かったものが「もぐらをつかまえた」という記事であった。その児童にインタビューしたことをきっかけに、「前回は死んだもぐらだったが、次は生きたもぐらを捕まえたい」とその児童からセンターに相談がくるようになった。相談を重ねていき、本人が国立科学博物館の専門家のところで学び、遂に生きたモグラを捕まえることができた。そして、その自由研究が再度受賞した。その児童にとっては受賞した喜びだけではなく、親や先生ではない大人とのつながりを通して自らの思いを実現できたことに価値があったと考えている。子どもに、自由研究しなさいと言うのではなく、やってみたいことを「一緒にやろう！」という姿勢を大切に活動している。

東温市の放課後子ども教室や土曜教育活動の企画運営

東温市地域教育プロデューサー（地域学校協働活動推進員） 発表者　藤岡慶太

2017 年から東温市に地域おこし協力隊として移住し、横河原ぷらっとＨＯＭＥを活動拠点に新たな事業の企画や他市町との交流や移住促進・東温市のＰＲを行っている。協力隊１年目はアートヴィレッジの広報、ブログやＳＮＳ広報を行いながら、地域のキーパーソンや志が同じ人を探したり、この場所で何ができるか、色んなところに足を運んだりしていた。２年目は東温市の魅力をもっと発信できないかと新たなブログを作成した。また、キャンプ場を会場で東温市の自然を活かした滑川ブックキャンプ、滑川どろんこサッカーといったイベントを企画・運営した。この頃から地域学校協働活動に参加してみないかと声を掛けていただき学校と関わるようになった。３年目には個人事業準備、任期後の選択肢づくりを中心に活動を行った。同時に地域学校協働活動推進員をスタート。最初は軽い気持ちで受けたが、今も活動している。放課後子ども教室をはじめ、重信・川内わんぱく広場・ジュニア体験塾・東温市地域未来塾などたくさんの教室を企画・運営している。かぼちゃのカービングや段ボール獅子舞の工作、ペットボトルロケットの作成など魅力ある教室がとても人気になっており、希望者が多数になっているため抽選で参加者を決定している。教育活動を行うことで協力隊の活動でイベントを企画する際も学校への協力が得やすく、地域おこしの面でも相性が良いと考えている。また、子どもの居場所づくりや教育は将来のまちづくりと直結すると考えている。教室の運営だけでなく自身が企画する事業に地域の大人や学生などにサポートしてもらうことがあり、地域おこし協力隊をやっていたおかげで地域の人とつながりが持ててうれしく思っている。様々な立場の人とのつながりを活かしながら今後の活動を進めていきたい。

【質疑応答】

＜子どもと大人がワクワクを語り合う街に＞

Ｑ　高校生スタッフは何人ぐらい参加した？受験への影響は無かった？

Ａ　普通科女 15 名男 2 名。夏休みに来ていただき、受験勉強に支障がないように気を付けた。

感　校長先生が変わっても続けることができるように、何年も続けてほしい。また様々な高校へ広がると良い。

Ｑ　消防士などなりたい職業ややりたい希望があったが子どもからの希望をすべてかなえることができたのか？

Ａ　子どもの夢を半分程度かなえることができた。中には途中でリタイアし連絡が無くなることも。リタイアすることが無いように保護者とメールや文書で連絡を取りケアをしていたが、あくまで子どもたちの自主性を尊重している。行政としてはできるだけすべてかなえて欲しい気持ちがあったようだ。

Ｑ　スタッフの大人たちをどうやって集めたのか？

Ａ　青年会議所を中心に+α、保護者の親などに声掛けを行った。

Ｑ　子どもの募集方法は？

Ａ　２か月前から学校にチラシを配った、校長会へも説明に行った。しかし、ふたを開けたら２人しかいなかった。そこで、再度いろんな子を探したり、お願いしたりして結果 50 名集まった。宇和島

市の教育長にもご協力いただいた。

Q　何か印象に残っているエピソードはありますか？

A　船に乗りたいと言った子が難病を持っていて、夢をかなえることができてとてもうれしかった。また、予土線を廃止したくないという夢をかなえた際に、駅長さんにお願いをしに行き、作成した動画がＣＭ大賞で特別賞をもらうことができた。

Q　大人サポーターについて、内部の規定があるか、これからどうするか？

A　キーパーソン 21 という団体のプログラムを参考にしている。そこで親以外はお金を出してはいけないという決まりを作った。

Q　うちの地区では高校生と接点がない。宇和島市はすごい。今回はどうやって実施したのか？

A　宇和島市のホリバタ事業を活用している。ホリバタを通して学生たちから連絡がくる。テスト期間中はかなりの人数が訪れる場所になっている。

＜子どもの？を！に　～人生まるごと自由研究～＞

Q　ただ場を提供するのではなく、対話を進めて歩むことが大事だなと思いました。今後の展望や大事にしたいことはありますか？

A　大人と子どもが共に学ぶ場を作りたい。大人と子どもと一緒に地域の歴史を学ぶ場を作りたい。一緒にやろうという事業をしたい。

Q　広報誌はどのように配布している？

A　区内の学校に交換便で送ったり、区内の施設のパンフレットスタンドに置いてもらったりした。学校に送るときは、主旨を説明する資料を添付し、全校児童・生徒に配布してもらえるように依頼した。

Q　山口さんと誰が作っている？とても分かりやすくうらやましいと思える広報誌です。

A　自分ともう一人との二人で作っている。

感　親や先生とは違う大人と関わるって本当に大事だと感じた。

Q　ＨＰに広報誌の掲載はない？ぜひＨＰにあげてほしい。

A　ない。考えてみます。

Q　自由研究に取り組む子はどういった子なのか？

A　好きな子は身近なところに題材を見つけているし、その子の家族の支援もあると思う。普通は自由研究するところまでたどり着かないかもしれないが、受賞者のお父さんがそこに面白さを見いだして、じゃあこれをもっと調べてみようといったことをしている。

感　自分の子どもが日常生活の中の？を見つけた時に、「自由研究でやってみたら？」と声掛けしたところ、たまたま受賞することができ、子どもの中では貴重な成功体験となった。親は答えを教えてはダメだと感じた。

＜東温市の放課後子ども教室や土曜教育活動の企画運営＞

感　地元では協力隊がなかなか定住に結び付かないので地域に溶け込み、色々なことをされている藤岡さんはすごい。藤岡さんの人柄で上手くいっているように感じる。

感　発表にもあった通り地域学校協働活動推進員になっているのは地域や学校とつながれていいかもしれませんね。

Q　最初からうまくいっている？地元からの摩擦はなかった？

A　自分のところはあまりなかった。自分の後にきた地域おこし協力隊が大量にやめてしまった事例が

ある。

Q　教育事業を行うのにちゃんとお金になっているのか？生活できているのか？

A　それだけで生活していくのは難しいと感じる。今、地域教育プロデューサーという肩書きはいただいているがそこに予算はついていない。地域学校協働活動推進員の時給換算したものは活動した分だけいただいているのと放課後子ども教室の委託費をいただいている。

Q　コーヒーショップの店主をはじめ、たくさんの仕事をされているが、どういう働き方を目指しているのか？

A　協力隊になる前から、いろんな仕事をやりたいと思っていた。活動の中で偶然いただいた仕事もあり、今日もこの場にも呼んでいただきありがたいと思っている。

Q　人と人をつなぐときに、大切にしていることは？

A　感覚的に合わないなと思うことはやらない、時には断ることは大事。嫌々していると迷惑がかかると感じる。

Q　その時の担当や校長が代わったら状況はかわらない？

A　３校放課後子ども教室をしていて、はじめる時に校長先生にお願いに行ったときに反応があまり良くなかったところもあったため、人が代わってしまうと状況も変わってしまうことはあるのではないかと考える。

Q　放課後子ども教室のスタッフは何人？誰が手伝ってくれる？

A　最低３人は固定で来てくれる。現地域おこし協力隊やぷらっとＨＯＭＥの職員、どうしてもの時は学生に声掛けしている。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　大人や社会人と関わることで考え方が変わったり、視野が広がったりすると感じる。学生の時は学校の先生ぐらいしか関わることが無いのでは学べないことがある。

○　地域教育実践交流集会に以前大学４年の時に来たが１年の時に来ていたら良かった。いろんな方向からいろんな人が支えてくれていることを、もっとはやく来て学べたら、もっとキャリアが広がったのではないかと感じる。

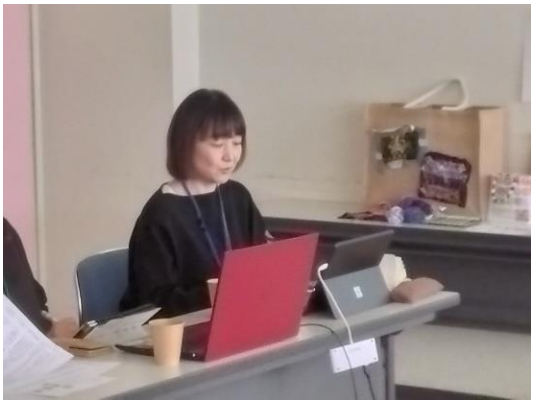
○　学校の先生も地域の活動に目を向けてくれている先生が増えた印象がある。中学生・高校生を地域の活動に入れてくれませんかと行政側にお話をいただくことが増えたと思う。それを受け入れることで地域や大人も変わってくると考える。地域教育実践交流集会のような互いを知る場を設けていただけてありがたい。

第８分散会

ファシリテーター　　柴崎　あい
分散会記録者　　村中　昭広

横浜市青葉区を中心に活動する障がい児・者の保護者ネットワーク

あおば障がい者児ネット　つむぐ　　発表者　佐々木　由紀



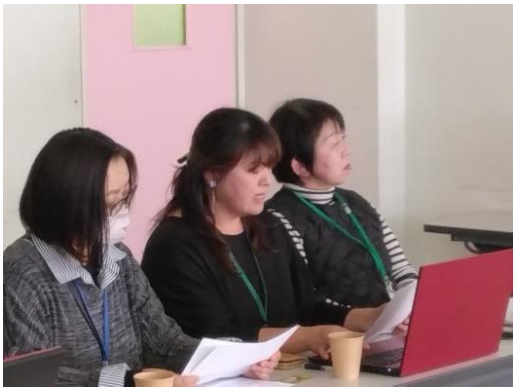
「あおば障がい児ネット　つむぐ」は、横浜市青葉区在住の障がい児・者の保護者と「共生社会」の実現を目指し、地域福祉の情報共有や課題解決を目的に結成した団体である。保護者同士、様々な団体、地域の方々とのつながりを目指して、協力できるような場となるような土壌作りに努めている。

福祉とアートをつなぐ活動を行い、ゆるゆるアート教室などをひらいている。親にとっては、子どもはいつまでたっても子どもなのだが、「子ども」として思ってはいけないということに気付かされる。子どもたちも、自分の考えをしっかりと持っているのである。そのような子どもたちの考えや思いを生かすことができるよう、自由な発想で作品作りに取り組ませている。

多くの保護者に、自分一人で抱え込まずに、周りには、支援してくれる人がたくさんいることを知ってほしい。親がいなくなっても、支援している人がたくさんいる。そのような人と一緒に関わりながら生きていくことが、障がい者の自立につながるのではないかと考えている。

竹を活用した子どもたちの体験・居場所づくり

いよあかり　　発表者　須賀　弥生・福森　清子



「いよあかり」は、子どもたちの「やってみたい」を応援したい、その居場所づくりをしたいという思いからスタートした小さなグループである。竹林を活用し、地域の人や子どもたちが世代を超えてつながり、自分の街を好きになってもらえるような活動を行っている。

お月見パーティー、竹あかりつくり、絵本を楽しむ会、地域を照らす灯り作り、伝統工芸品の大洲和紙へのギルディング体験などの活動を行っている。「人々の心に寄り添い、地域を照らす灯りでありたい。」「世代を超えてつながろう。」「みんなの居場所を見つけよう。」という思いを大切にしながら、活動している。

地域学校協働活動×コミスクのキーパーソンのシン・ネットワーク

えひめ地域コーディネーター・ネットワーク　　発表者　福本　政代・酒井　あい

「えひめ地域コーディネーター・ネットワーク」は、コミュニティ・スクール化が進む愛媛県内で、身近に相談できる相手がおらず孤独を感じていた地域コーディネーターの「つながれる場所」をつくろうと立ち上げたものである。

毎月のオンライン・ハイブリッド・対面での交流会では、地域コーディネーターだけでなく、学校、地域、行政関係の方々が参加し、それぞれの立場での話を聞くことで、お互いの思いを理解し、コミスクを理解し、多くの学びや気づきを得ている。つながりを広げて、孤独ではなくチームでコミスクを進めていきたいと考えている。地域の子どもの育成にかかわる全ての人の応援団でありたい。

【質疑応答】

＜いよあかり＞

Q　なぜ、竹あかりを始めたのか。

A　インターネットで見て、「素敵だな。やってみたいな。」から始まった。実際にやってみると、竹あかりつくりという非日常体験を通して感動を得たり、あかりを見て癒されたりする。魅力や人々に与える効果、放置竹林を活用した地域活性に繋がることがわかった。

感　「やってみたい。」で終わらず、行動することがすばらしい。

Q　イベントの集客方法は。

A　1 年目は知人や友人からスタートし、2 年目に入るとそれに加えて、紹介やインスタからの申込、チラシなどにも広がっている。

Q　集客の工夫は。

A　参加した人からの紹介や夏休みの親子体験の企画、インスタやチラシなどでのイベント周知を促したりしている。

感　学校にお願いして、説明会をしたり、ポスターをはったりしてもらえたらいい。

感　大人の実働部隊をどれくらい集めることができるかが大切である。熱のある大人を集めることを第一に考える。子どもはその次である。

感　事業を行うとき、その事業が、ボランティアのニーズに合っているかも大事である。一斉メールでのボランティア案内だけではなかなか集まらない。直接電話して、だれかいないか声をかけている。やはり口コミが一番効果的である。

感　大学生のボランティアは、大学の先生が声をかけると集まりやすい。公民館で事業を行う際、学校の先生が子どもたちに声をかけると伝わりやすく、参加してくれることが多い。公民館から案内するより、学校の先生から声をかける方が安心感があるのではないか。

＜えひめ地域コーディネーター・ネットワーク＞

感　「ひらの未来塾」を開き、小中学生が公民館で夏休みの宿題をしている。学校の先生に「ひらの未来塾」のよさを知ってもらって、子どもたちに「行ってみたら？」と声をかけてもらうようにしている。先生とのつながりは大切である。

また、ボランティアの大学生は、大学生同士のつながりで、友達を連れて来てくれる。さらに、大学生に「ボランティア証明書」を出している。直接個人に渡すのではなく、所属校の理解・協力によって発行してもらっている。

＜あおば障がい者児ネット　つむぐ＞

感　地元の支援学校にボランティアが来てくれた。担当の先生が直接電話をかけてくださった。集客には、電話は効果的である。

直接学校に行ってプレゼンをして趣旨を説明するなど、「対面の力」は大きいと感じる。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　小・中だけで盛り上がるのではなく、幼・保との連携も大切である。保育所の夕涼み会を小学校の PTA が手伝っている。その代わり、小学校の運動会には、保育所の保護者会も協力している。保護者同士のシステム作りが大切である。

○　幼・保の親子が楽しめるように、小 1 プロブレムを防ぐことができるように、家庭教育がしっかりとされるように、一つ上の世代である小学校の PTA がサポートすることが大切である。

○　学校現場はいそがしく、「やって。」と言われても拒否反応がある。しかし、最初は面倒かもしれないが、軌道にのったら学校だけではできない、もっといいことが子どもたちに提供できる。具体例を挙げると、地域の街づくり協議会の中に陶芸家の方がいて、「陶芸をやらないか。」と声をかけていただき、お願いした。粘土の準備や指導など、全て快く受けていただいた。子どもの作品は美術展で入選することができた。

地域の方のおかげで、学校ではできないことができた。入選した子どもだけでなく、協力した地域の方も喜んでいただいた。

○　自分がやりたいことをするというスタンスを常に　持ち続けたい。

○　「やらなきゃ。」で動くことがあるけれど、「やりたい。」で動くことが大切。

分散会９

ファシリテーター　遠藤　敏朗
分散会記録者　　高田　容弘

ＮＰＯ法人みらいず works

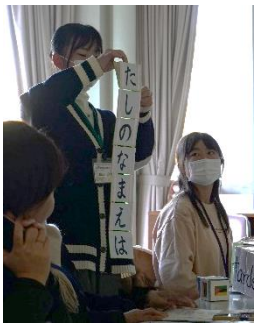
自分軸と社会軸が育つキャリア教育の推進　　角野　仁美

みらいず works は、2012 年より新潟市を拠点に活動している教育支援団体である。「未来にふみ出す学びを、子どもたちへ」をキーワードに自分軸と社会軸が育つキャリア教育の推進に取り組んでいる。現在、学校教育領域では、「探究的な学びづくりの支援」を軸に、小・中・高校の授業やカリキュラムづくり等を行っている。中学校では、探究型、題解決型の職場体験を提案した。去年から新潟市や魚沼市と連携し、魚沼市では CS ポートフォリオの導入や研修を実施。新潟市では CS を導入する前に「未来のために種まきプロジェクト」を実施。会議を通して総合的な学習の時間の内容を考え、それを実際にモデル的にやってブラッシュアップしていった。調査結果から、生徒の伸びに共通している要因が、カリキュラムの内容ではなく、どんな大人が子どもに関わっているか、関わっている大人の在り方が生徒の力の伸び率に影響していることが分かった。子どもの周りにいる大人たちが主体性を持って自分自身も探求し、みんなと協働する、社会性を持っている、そんな大人が子どもに関わることが何よりも大事だということを日々感じている。コミュニティ・スクールは一つの手段であり、大事なことは周りの人たちで、これからも学び合いの場を作っていきたい。

特定非営利活動法人　えひめグローバルネットワーク

アフリカ・モザンビークで ESD・SDGS を体験した中高生の活動報告

えひめグローバルネットワークは、SDGs 達成に向けて、ESD を実践している。「銃を鍬へ」というモザンビークの NGO が進めているプロジェクトを応援している。



飯田　夕和「教育の視点から見るモザンビーク」

4 つの学校を訪問し、日本文化を紹介した。シニャングァニーネ村では子どもたちの視力、身長、体重測定した。また、モザンビークの伝統布、カプラナ布で作ったフェアトレード応援作品作りを行った。帰国後は、学校の文化祭でフェアトレード応援作品を展示したり、カプラナ布で作った浴衣を着て文化祭で披露したりした。モザンビークの様々な問題を目の当たりにし、問題を解決するのは教育だと思った。自分にできることは伝えることだと思い、フレンドシップキューブを活用して学校の文化祭で伝えたり、 モザンビークデイで発表したり、 小・中・高校、大学、地域社会で発信している。

蔵野　美結「環境問題に関わる現地で行った活動と印象に残っていること」

マイクロプラスチックの海岸調査を行った。調査 2 日目はたくさんのマイクロプラスチックが見つかった。材質を分析すると、ポリエチレンとポリプロピレンの 2 種類であり、モサンビークは家庭からのゴミが多いと考えられた。エコブリックの活動も行い、現地でペットボトル 7 本を使用し、モザンビークの伝統布であるカプラナ布をかぶせた椅子を作った。村の小学校では机や椅子がない教室があると言っていたので、 これからエコブリックで解決に向けて行動したい。多くの社会問題に関心があるので、モザンビークでの活動を積極的に伝えていきたいと思っている。

畑地小学校　地域学校協働活動「和船競漕・三番叟」復活有志

「とある学校と地域の伝統行事復活の物語」　猪野　啓士郎

学校と地域と家庭が連携し、学校教育の立場から地域を活性化のために貢献するには、校長が積極的に地域に出向き、信頼の貯金を行い、よりよい関係性を築かなければいけない。今年度から学校の教育目標を「ふるさとを愛し、一人ひとりが輝く、畑地の子の育成」に変更した。そして、カリキュラム・マネジメントを行い、本校の教育課程の中に地域教育に関わる取組等を入れ込んでいった。それらの内容を ESD カレンダー活用の校内掲示物等で「見える化」し、子どもたちにも、先生方にも意識付けするようにしている。「地域とともにある学校」から「地域の核となる学校」へ、そして、学校の「ふるさと化」の実現に向けて取り組んでいるところである。

○　地域間交流「和船競漕」

地域学校協働活動研修会で、隣の下灘地区の公民館主事から、伝統的な和船和船競漕を４年ぶりに復活させたい、なんとかしたいという思いを聞き、協力するために手を挙げた。全校地域学習としてカリキュラム・マネジメントを行い、「津島地域の伝統文化を学んだり、地域間交流を行ったりすることを通して、自分たちのふるさとに愛着と誇りを持たせる」という目的を先生方に伝えた。当日の活動では、和船保存会の地元の方々や校区隣の下灘小学校１、２年生と交流した。和船体験を通して、子どもたちに地域学習のよさやふるさとを大切にする思い等が伝わったと感じる。

○　地域行事復活の物語「三番叟」

畑地地域の方から伝統芸能「三番叟」を盆踊り大会で復活させてほしいという思いを聞いた。「地域のためにやってみよう。」と学級担任を通して、児童に呼び掛けたところ、高学年女子児童と卒業生の女子中学生が取り組んでくれるようになった。指導してくださった御年 85 歳の地域の方も、「私も嬉しくなった。」と感激しながら指導してくださった。保護者の方も喜んでくださり、みんなで協働しながら三番叟が地域の盆踊り大会が６年ぶりに復活し、当日はこれまでで一番人数が集まるほど大盛況となり、地域に貢献することができた。

【質疑応答】

〈ＮＰＯ法人みらいず works〉

Ｑ　大人が立場を超えてチームになるときに、重要なこと、気を付けていることは。

Ａ　前向きな気持ちを持つことが一番大事。コミュニティ・スクール的な視点でいくと、校長先生が実際に動けるメンバーを選出し、総合のカリキュラムを作って動かすというところまで想定してチームを作るという柱を立てたのがすごく大事だった。

Ｑ　立場が違うと見えてくるものが違うことについて、学校と地域の目線の違いの順番について説明して欲しい。

Ａ　地域の方は、地域課題がまず念頭にあるが、学校は生徒の学びが一番。その違いをお互いが知ることが大切。これはどっちが良い悪いじゃない。この目線の違いをお互いが理解することが大事なポイントであると思う。

Ｑ　みらいず works の授業では自分軸をどのように構築していく活動をしているのか。

Ａ　佐渡市の場合は、小学校６年間のキャリア教育の授業の冊子を作った。まず、自分を知るために自分が住んでいる地域や親、自分の周りの人たちについて知った。次に、友達から自分の特徴や良いところをたくさん伝えてもらい、自分の良いところを感じることができるようにした。さらに、地域の方、大人との対話を通していろいろな視点を得た。最後にみらいづくりワークといって、自分が将来を考える上で大事にしたいキーワードを５つくらい作ってそれをみんなで共有した。卒業前にはみらいキャッチフレーズと、25 歳ぐらいをイメージして、こんなことをしていたら嬉しいなみたいなこと

を言葉にする活動をした。
○　コミュニティ・スクールで地域と学校が協働する時に大事なのは、立場の違うものが話し合って共通理解をしていくこと。単に言葉の意味の共通理解だけではなく、言葉の意味の裏に自分たちと学校、自分たちと地域、自分たちと子どもとの関係の見方が違うということを自覚しながら、同時にそれを乗り越えていこうとするが考えが働かないといけない。
○　コミュニティ・スクールで基本になるのは、校長が自分のビジョンをどれだけ初めにみんなに披露できるか。それがあったら、それを熟議にする際のたたき台にして、お互いのズレが見えてくる。地域の人は学校に対してなんとも言えない愛着をみんな持っている。そこをうまく引き出せるような関わり方をみらいずワークさんがやるともっといい地域と学校の関係性ができていく。

〈特定非営利活動法人　えひめグローバルネットワーク〉
Q　モザンビークの教育について、学ぶ意欲があるけれどお金がなくて環境がないのか、先生が教育の仕方等をあまり知らなくて環境がないのか。
A　先生方は、学ぶ意欲があり、生徒たちも学校に来ることを楽しみにしていて、環境としては整っているように感じた。でも、教材といった面でまだ足りていないと感じたので、私たちは子どもたちが計算や共通の言語である英語を学べる教材を増やしていきたいと思って取り込んでいる。
Q　海外に行って帰ってきて、考え方でも何でも、行く前と何か変わったことがあるか。
A　モザンビークの村で電気も水もない暮らしをして、日本に帰ってきたときに、無駄遣いが多いと感じた。生活する上で、水を使いすぎないようにしたりとか、電気を使いすぎないようにしたりしている。
A　心の幸福度について考え方が変わった。現地の人たちが一人の喜びをみんなで共有している姿や、毎日一生懸命生きて、あるものを最大限使い工夫して生活していて、そういう姿を見て帰国した時に、日本は物が溢れて便利過ぎて忙しすぎる、そういう息苦しさからくる愚痴や不満を感じた。モザンビークにいた時は本当に幸せだったと感じている。
Q　誰一人取り残されない社会を作るということと、モザンビークの今の幸福感、協調的な幸福感で幸せが獲得できるというところが矛盾はしないか。
A　比較して幸せになる人、不幸になる人がいる。でも、自分軸がしっかりすると、自信を持って今の自分に合う幸せを感じられる。大事なのは、その幸せを感じられる自分でいられるかどうか。発表予定だった中学生の安永さんは、モザンビークの子どもたちに、何になりたいか、夢についてインタビューした。モザンビークの子どもたちはほとんど誰かのためになる仕事を選んでいた。日本はどっちかというと自分がやりたいみたいな感じで、何かそこに違いがあるというのを彼女も気が付いた。
○　学校訪問に子どもたちだけでも行くようになった。体験型でやらせてもらい、プレゼンをたくさんした。このプレゼンの準備をするときに、子どもたちの振り返りができて、学びが深まった。さらに輪が広がり、愛媛大学附属高校にあるモザンビーク班と松山北高校にあるモザンビーク班と一緒に活動するなど、子どもたちだけでも活動できるようになってきている。

〈畑地小学校　地域学校協働活動「和船競漕・三番叟」復活有志〉
Q　「先生方のやりたい」という思いと、同僚性を高めて教職員チームをつくっていく。校長として、そういう先生方との関係性を構築する上で大事にしていることは何か。
A　空いている時間とか研修会とか、決まった時間だけじゃなく、雑談的に冗長コミュニケーションを取り、先生方だったらどんなことができるか等、対話することを心掛けている。先生たちがしたいことがあれば、校長も地域に出向いて一緒に顔を見ながら、お願いする。また、本校の地域コーディネーターが地元の方で、地域をよく知っている方なので、学校と地域のつなぎ役になってくださっていることが、とても大きい。
○　この学校の教育目標が皆に分かりやすいこと、成功のもとはこれ。「ふるさとを愛し」というのを頭に持ってきたところで、皆、だいたいのイメージが固まる。共通理解をすぐに図ることができる。
A　今年度最初の学校運営協議会の学校経営方針説明の際、これ（学校の教育目標）を出した時に、地域の方々が頷いてくれたので、「よっしゃ。」と思った。地域の方々が、「協力しますよ。」と言ってくださったので、本当に有り難かった。協力的で、温かい地域性という土俵がきちんとしている

から、子どもも先生方も動きやすいし、地域の方々も動きやすい。だからいろんなものを協働してつくることができている。いつも地域の方々が温かく支えてくださっている。

Q　ある自治体の学校では、空き教室などを活用して地域の方が、学校の中に常駐しているところもある。畑地小学校に、そのような場所があるか。

A　今後、空き教室を利用して、ご助言いただいたような場所を作りたいとは思っている。そうした教室がなくても地域の方々に気兼ねなく訪ねて来ていただいているが、個人的には、そういった部屋があるといいと思っている。コミュニティ・スクールの機能をうまく使えば、学校がカラフルになる。地域の方が入ってくださると、学校の応援団が増える。

Q　公民館とは、どんな関わりをされているのか。

A　畑地公民館長さんも公民館主事さんも、本校の職員のように関わってくださっている。公民館長さんは、畑づくりの先生として子どもたちに野菜作りを教えてくださったり、公民館主事さんはプール清掃も一緒にやってくださったりした。学校側の要望だけじゃなくて、公民館行事には学校も関わり協力する。学校のすぐ近くに公民館がある。地の利があるのでロケーションもいい。もともとは、相互支援のスタンスから動き始めた学校と地域の関わりが、いつの間にか、協働的関係に変わっていった。

○　学校をみんなの学校にしてしまう一例として、学校の中に地域のコミュニティ・ルームを作っているところもあった。入り口に大きなホワイトボードがあって、 学校の先生が何かやってもらいたいことを記入する。それを地域の人がやってきて、内容のマッチングをする。そうすることで、学校を核にした新しい地域が生まれるのではないか。

○　今後、「学校のふるさと化」は重要になると考える。結局はやっぱり「人」。ずっと繋がる人たちが地域にいて、学校と関わっていてくれていると、子どもたちもふるさとに帰ってきやすいのではないだろうか。

〈全体を通しての意見交流〉

○　児童クラブでも体験学習を取り入れるようになった。全く興味を持たずに一人の世界に行ってしまう子どもには、他の子どもたちと楽しんでいる姿を見せて、自分もやってみたいな、そういう気持ちを持たせるようにしている。

○　将来、ただ何をやりたいかというより自分がどうありたいかということの方が大事だなというふうに今日の話を聞いていて思った。

○　私は伊予市双海町で、公民館の活動をジュニアリーダーして参加している。先日は、アレック・ディクソン賞をいただいた。そのとき、なぜ続けているのかと聞かれて、ふるさとを愛する気持ちがあるから続けているんだと思った。ジュニアリーダーとしてみんなが続けるためには、大人やジュニアリーダーの中の年長者が熱を持って本気で楽しむ姿を見せれば思いが伝わると感じた。

○　NPO 尾道寺小屋で子どもたちが尾道市を 100 キロメートル歩く旅をやっている。子どもが多い環境での体験学習をどうやってやったらいいのかと考えるきっかけになった。

○　地域で花を植える活動が、10 年ごとにステージが変った。次はどうなるかと期待している。地域をつくる思いがあればいつの間にか地域の文化に変わっていくと思う。これからも一緒に皆さんと頑張っていけたらいいなと思っている。

第１０分散会

ファシリテーター　　浅野　長武
分 散 会 記 録 者　　本明　緑

Maincraft カップ運営委員会事務局

Maincraft カップ運営委員会事務局　　発表者　白田　侑子

Maincraft とは、簡単に説明するとパソコンやゲーム機などで遊べるレゴブロックの３Ｄ版である。本事務局では、教育版 Maincraft を使った作品コンテストを実施している。現在５回開催しており、参加者は大人も含めて約１万人を突破している。テーマに沿ったワールドを制作し、年齢ごとに分けられた部門ごとに応募する。小学生から高校生まで応募可能で、全国 13 地区ブロックで開催している。大会への参加者を増やせるよう、取組を行っている。

教育版 Maincraft では、プログラミング学習や協同作業ができ、ゲームの域を越えて将来に役立つ力を身に付けられる。学校でも社会科や理科の学習で用いられている。「デジタルによるものづくりに取り組める機会を増やす」ことを目標とし、１人１台の ICT 機器に Maincraft の導入を目指している。

その他の取組として、マインクラフトの世界の中で廃校を再現し、リノベーションしていくワークショップ教材を開発し子どもたちに展開したり、大人や子ども、教員向けの研修やワークショップを開催したりしている。自治体や行政のまちづくりや観光事業の一環として、対象とする地域をマインクラフト内で再現して、新たな価値を生み出すといった取り組みもサポートしている。

NPO 団体イイトコ道後

NPO団体イイトコ道後　　発表者　阿河　優里・森山　真菜・斉藤　葵

道後地区にある上人坂は、明治時代は遊郭として、昭和時代はネオン坂商店街として繁栄していたが、現在はその面影はなくなってしまっている。本団体は、歴史と情緒あふれる上人坂を活性化させたいと、イベントの企画実施や商品開発を行っている。

「夕焼けベンチ in 宝厳寺」というイベントでは、夕焼けを眺めながら、３種類の坊ちゃん団子を食べ比べすることができる。「知られざる裏道後ツアー」では、上人坂や道後周辺の歴史を紐解きながら案内を行っている。

また、過去には、「からふる坊ちゃん 2030」と題し、坊ちゃん団子の過去から現在を学んで、未来の坊ちゃん団子の製作をしたり、「フォトスカベンチャーin 道後」では、クイズ形式のお題からその場所を探し、写真を撮ってきてもらったりした。2023 年は、「サマーフェスティバル in 上人坂」と題して、夏祭りを開催した。地元企業との商品開発も行っており、そば猪口や道後サイダー、日本酒のラベルを製作している。さらに、企業の視察対応も行っている。まちづくり協議会や企業に対してツアーを実施している。

愛媛県立八幡浜高等学校商業研究部 A★KIND

八幡浜高等学校　発表者　菊澤　郁代

昭和 45 年に発足し、平成 12 年から「バーチャルカンパニーA★KIND（アキンド）」の名称で活動している部活動である。毎年７月に県生徒研究発表大会に出場し、17 連覇を達成している。昨年度までは全国大会にも出場している。地元企業や NPO 法人、市役所や県内外の大学など、地域の様々な関係団体と連携して活動している。

魚食教育として、シーフードセンターや給食センターと連携し、未利用魚を使った給食のメニューを作成し、小学生と給食交流会を行い、クリアファイルを作成・配布した。さらに、後継者不足やコロナ禍で苦境に陥る養殖業者支援のための商品開発も行っている。地元のマーマレードと鯛を使った、宇和島風いよかん鯛めしや柑橘香る真鯛の和風パスタソースの開発を行った。加えて、関係機関の方々の協力を得て完成したクリームパスタソースは PB 商品として、スーパーでも販売される予定である。

また、今春には、地元産の果物を活用したジェラート作成にも取り組んだ。さらに、廃棄されてしまう規格外商品はフルーツチップスにアレンジしたりしてトッピングに使用している。

【質疑応答】

＜Maincraft カップ運営委員会事務局＞

Q　マインクラフトは、子どもたちにとってどんな体験になるのか。

A　Minecraft カップへの参加を通して、大会に参加するために保護者を説得したり、どういうものを作るか考えてスケジュールを組んだりするので、最後には成功体験を得ることができる。また、フリースクールや不登校の子でも、外に出るきっかけになる。

Q　大会までに指導者が大切にしていることは何か。

A　自分が子どもの雑音にならないようにしている。また、衝撃的なことを言わないようにしている。子どもがやりたいと思ったことをすぐ諦めさせるのではなく、実現できるよう夢を描けるようにしている。さらに、マインクラフトを通して、現実世界でのリテラシーや危険性も考えることができる。

Q　子どもの作品はどこで見ることができるのか。

A　当日実際に大会の出品作品を映像で見た。現実世界で使われているエネルギーを、マインクラフトの世界で実現させている。Minecraft カップ公式サイトに応募作品が載っています。

Q　１人の部、複数の部での募集はしないのか。子どもだけでやったとは思えないものもあるのではないか。

A　検討中である。同じ子が再度入選することもある。支援する周りの大人の在り方を確認しなければならない。

Q　準備物は何か。

A　パソコン、もしくはタブレット。ライセンスを取得してすることもできるし、条件によっては事務局に申請すると無償での貸出もある。

感　子どもが自走していくのがすごい。保護者を説得させるところからさせるのがよい。マインクラフトをいきなりさせるのではなく、話合いからさせるのもよい。

＜ＮＰＯ団体イイトコ道後＞

Ｑ　イベントのネーミングがすばらしいが、どんな風に考えているのか。

Ａ　話合いの中でネーミングを決定している。

Ｑ　どうしてそんなに情熱をもって活動できるのか？

Ａ

・地元愛が強い。イベントやお祭りが好き。今はただの坂なのに、いろいろな歴史があることに衝撃。本当の道後のよさを知ってもらいたい。

・高校２年生からまつやまアーバンの活動に参加。やっていて本当によかったと実感。

・友達の誘いがきっかけ。まちづくりや防災の学科に所属。まちづくりに興味があった。どうやって地域を強化するのか企業と話し合う中で、地元の人たちの思いを聞くことで、面白さを感じたり、自分たちも関わりたいと思ったりした。

Ｑ　活動と学業との両立は大変だったか。

Ａ　大変。ただ、大学の学部によっては、学業にとって考えを深められることもある。また、全員が対応できるようにスケジュールを決めている。

Ｑ　イベントは企画から運営までやっているのか。

Ａ　全てやっている。スタッフに何をやりたいかを聞いて、全部考えながらやっている。ずっとやっているものは踏襲するので、なんとかできている。スタッフ以外にも、手伝える人をお願いする場合もある。それがきっかけで、団体に入ってくれる人もいる。

感　自発的・自律的な人たち。少人数だけれど、精力的ですごい。

＜愛媛県立八幡浜高等学校商業研究部 A★KIND＞

Ｑ　商業研究部に入る生徒の動機は何か。

Ａ　希望する人は年に１人。１年生は必ず部活に入らなければならないので、諸事情で他の部活動をやめた人が入ることもある。

Ｑ　２、３年生には商業研究部について、どのようにアピールするのか。

Ａ　「部活時間は長くない」「東京など県外に行ける」「大学入試に役に立つ」とアピールしている。

Ｑ　部活をやめる子はいるのか？

Ａ　勉強したいのでやめさせてほしいという子はいる。

Ｑ　生徒はどんな成長をするのか。また、どんな学びを得て卒業するのか。

Ａ　「やりたくない」「面倒くさい」と言っていた子が、周りの声かけのおかげで、できることが増えて自信がついてきて、「これがやりたい」と積極性が見えてくる。人として大切なことは身に付いているように思う。

Ｑ　地域の事業にはどのようにして関わっているのか。

Ａ　企業から他の企業に紹介をしていただいて、企業の方から声をかけていただくことが多い。済美高校との連携も、イベントで知り合った企業の方とのご縁で実現した。

Ｑ　「アキンド」という呼称になったのはいつか。

Ａ　平成 12 年度に改名。

Ｑ　企業から活動をお願いされるのではなく、学生が主体で行うことはあるのか。

Ａ　活動は「何かできることはないかな？」というところから始める。「こういうことが問題になってい

る」「よそがこういうことをしているからしたいです」と言って始めることが多い。少人数だからこそフットワークが軽い。

感　やっていることは大学入試でアピールできるので強い。「これからやります」という人より、経験がある人は強い。

感　娘がこの活動を通して、おそらく地域のことを知らなかったであろうに、地域の話が出るようになった。町ゆく人から声をかけられ、話すようになっていて、驚いた。

感　少人数ながらいろいろなことをしている。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　様々な団体の活動を知ることができて、とても勉強になった。

○　高校生のときは地域のことには興味がなかった。大学生になって学部で地域のことについて考えを学ぶ中で、なぜ地域に関わることをしないのか不思議に思う。

第 11 分散会

ファシリテーター　大美 和博
分 散 会 記 録 者　須山 華鈴

小学生が４泊５日を掛けて尾道市内１００km を歩き抜く事業

NPO おのみち寺子屋　発表者 今村 美雨 八木 廉士郎

NPO おのみち寺子屋では、青少年健全育成(体験学習)や生涯学習「やりがい・生きがいの創造」、市民参加の「ひとづくり」など、様々な事業を行っている。『おのみち 100 ㎞徒歩の旅』は小学生が４泊５日かけて 100 ㎞のコースを歩き抜くという体験活動を通して「生きる力」を育むことを目的とした活動である。毎日教育目標を設定し、それを基に活動内容を設定している。１日目は「出会い」、２日目は「挑戦」。子どもたち自身が創っていく工夫を意識している。３日目は「忍耐」最長距離を歩く。2.5 ㎞の坂道(びんご坂)を歩く。この期間中は保護者の応援は禁止としており、子どもたちが自立したうえでの挑戦を促している。４日目は「感謝」見えない力への感謝。身の回りの人だけでなく、子どもたちと直接関わっていないが支えてくれている人々への感謝も大切にしている。最終日の５日目は「感動」。5 日間をともに過ごした仲間とともに感動のゴールをしてもらう。理事長が作詞をしたテーマソング「夢に向かって」をみんなで歌っている。

スタッフが意識していることとして「５つの過」がある。過期待、過許可、過保護、過放任、そして過干渉。これらを与えないように気を付けている。また、子どもたちに成長してもらうために、学生自身がまずは殻を破るということが大事だと考えている。学生目線ではなく、子ども主体となるように、子どもたちのためになっているかを考えるようにしている。

子どもたち同士で励まし合う姿、感謝を伝える場面が増え、自分のしたいことを自らやったり、そのために計画的に行動できるようになった。など子どもたちの変化が見られた。また、参加した小学生が中学生となりボランティア研修生、高校生スタッフ、学生スタッフ、社会人スタッフへと繋がりができている。

70 の協賛企業、地域を挙げての協力で成り立っている。学生スタッフ 54 人広島県内を中心とした大学の学生が多く携わっている。困難なことも乗り越えようという姿勢や自分から行動を起こし、学びを得ようという学生の成長・学びを得られた。

納屋を図書館にしてみたら

公民家サークル　発表者 平岡 真由美

公民家(こみんか)とは、自宅、納屋、車庫などを開いて何かをしようという家の総称。コロナ渦に「公民家」として、納屋キッチンや農地(畑)の貸し出し、納屋図書室の開設などをした。図書室の活動を続けていくうちに、オンラインを活用してハイブリット型での納屋家庭科室を開催したり、町内防災訓練資料を掲出する黄色いハンカチプロジェクトを納屋前にて開催したりした。当初は不要になった本をご近所に提供する場であった「納屋図書室」が子どもから大人まで幅広く利用される休憩所、憩いの場になっていた。現在、「納屋音楽室」としても利用されはじめ、歌声キャラバンが行われている。紙芝居や体操教室、獅子舞など幅広く様々な交流の場となっている。

公民家は、「公」と「個」が融合した場所。目的地ではなく、ふらっと立ち寄り場であり、異質なネットワークができる場であり、孤独感を和らげるちょうどよい距離感(おせっかい)を保てる場である。今後、古本交換会や田んぼキャンプ、草

むしりフェスなどやってみたいことが沢山ある。

こうした活動を通じて、子どもたちは、比較的安心な実社会を経験できる。大人は、住んで安心の地域を得ることができるのではないかと考えている。職場や家庭、学校以外の居場所にもなるのではないか。こうした公民家があれば、安心だけでなく、次のわくわくが増えて幸福の輪が広がっていくのではないかと思う。

活動の延長線として、NPO 法人「石井わくわく物語」をたちあげ、「チョイソコいしい」という会員制のお出かけ相乗りサービスを始めた。足のない高齢者だけでなく、妊婦さんや子育て世代など若い世代にも多く利用してもらいたい。納屋図書室からはじまった取り組みがどんどん広がっているが、この土地でわくわくしながら過ごしたいという想いが根底に変わらずにある。

子どもたちが主体的に参画した立花ハロウィン

立花地区コミュニティ推進会　発表者　伊藤　雅章

愛媛県今治市立花地区にて立花カルチャーセンターを拠点に様々な行事等の運営をしている。

2010 年に立花地区コミュニティ推進会・地区自治会協働体制ができたことをきっかけに、学校と地域が融合して子どもたちを育てようという想いをベースに様々な行事等をしてきた。そうした経緯の中で始まったのが「立花ハロウィン」である。準備には子どもスタッフも募集し、イベントの企画や広告など子どもたち自身が計画を進めていった。大人も一緒につくる喜びをということで募集したが、上手くいかない部分もあったので、大人の参加のあり方は今後の課題である。その他にも住民運動会や小学校との地域の歴史学習、総合防災訓練での子ども防災士の育成など、子どもたちが主体的に参加できる行事を運営している。

立花ハロウィンをやってよかったこととしては、子どもたちが自主的に友人を誘い合って自主的に考え、その考えをいう場がつくれたこと。保護者が子どもの写真を撮りに来るだけの状態から、一緒に活動して楽しむことができるようになってきたこと。中核スタッフなどが「子どもの主体的参画」の視点を基に行事を考えられるようになってきたことなどがある。

今後、立花地区では、多様な期間がビジョンを共有し、コミュニティセンターとカルチャーセンターの良さを兼ね備えた、街づくりを自主的主体的な企画推進力を育むコミカルセンターと立花地区コミュニティ推進会としていきたい。

【質疑応答】

＜NPO おのみち寺子屋＞

Q　大人はどういった方が関わっているのか？

A　運営スタッフとして社会人スタッフが学生の指揮を執っている。団長１名、副団長１名は子どもたちとともに歩く。その他にも各部署に指導する社会人スタッフがいる。

感　親からしても、保護者の応援 NG は挑戦。保護者も教育されている。我慢したからこそ成長した姿が見られる。親子どちらにとっても素晴らしいこと。

Q　安全対策など、何かマニュアルがあるのか、それとも受け継がれてきたものか？

A　何か書いてあるというよりも、代々受け継がれている。職務分掌があり、最低限しなくてはいけないことは明文化されている。それ以上のことは自分で考えていかないといけない。生み出す苦しみも味わえという方針。保護者に対しても事前研修会を開いて理解を得ている。

Q　途中で脱落してしまった子はどうしているのか。そういった子たちに対してどう対応したのか。

A　歩かない子に対して対応する専門の係がいる。希望して来た子が多いが、保護者が応募した子も居るので、初日は渋る子も居るが、最終日にはみんなで協力してゴールしようという態度に変化してい

る。

感　最近の子は忍耐力が落ちているのではと思っていたが、こうした活動を通して忍耐力を付けていくことも大切だなと思った。

感　中高生が忙しくて中々ボランティアに参加してくれる子が少ない。田舎は田舎で地域のお祭りなどに多く参加してくれる。都会でそうした経験をした学生が田舎に戻ってきて、盛り上げてほしいなと思う。

Q　５日間歩く子どもたちは、歩く５日間以外でガイダンスなどがあるのか。また、１度参加した子は２回目以降も参加できるのか。

A　本番前に保護者研修会と同時進行でレクリエーションを行う。事業後には、事業報告会を行う。
２回目以降も参加可能で、過去には３回参加した子も居る。

感　地域づくりで、地域の先輩、大人たちを見て、「こうなりたい」「こうしたい」と思うことで地域に帰ってくる。また今度は自分がする側となり、好循環が生まれている。

＜公民家サークル＞

Q　公民館でなく、公民家だからこそできることも多い。運営費はどうしているのか。

A　運営費はない。場所使用料や会員料を一部集め始めたが、あまり足しにはなっていない。これから、同じような活動をしてくれる仲間を見つけて支援を探していきたい。

Q　様々な活動をしていく中で、子どもたちなど参加者からの声を知りたい。

A　図書室を利用していく子どもたちがいるが、あえてあまり話しかけない。用があれば話しかけてくるし、たまに話しかけて会話するという空気感が良いのだと思う。歌声キャラバンに参加している高校生の先生から聞いた話では、それまで自信なさげに歌っていた生徒が、世代の違う人たちの中で歌い、褒められたことで自信を持ち歌えるようになったと聞いている。

Q　どのような時にやりがいやこれをしてよかったなと感じるか。

A　使ってもらった時や自分が一緒にして楽しかった時。楽しさを共有する喜びや、自分のしたことで賛同して行動してくれる人がいた時はうれしい。

感　教師をしていると、教師の手の届かない子がいる。そうした子たちのふらっと立ち寄れる第３の場所があることの安心感がある。島でもこういった子どもの居場所づくりをしたいが、中々上手くいかないこともある。

＜立花地区コミュニティ推進会＞

Q　子どものサポートをしていった大人はどういった視点で行っているのか。

A　だいたいのパターン化されてきた枠組みの中で、子どもも大人も考えていく。感染症対策等に関してはかなり気を使い、大人の方からアドバイスを行った。

Q　企画を進めていく中で、本番当日に至るまでの準備期間はどのくらいか。

A　「こどもわくわく会議」にて保護者も一緒に振り返りをしつつ回を重ねていく。昔は、学校だけで教育ができるという考えを持つ方も居たが、今はそんなことを言っている場合ではない。学校と地域が協力して教育を行っていく必要がある。

感　公民館でも幅広い活動をしていこうという活動をしている。コミュニティスクールがまだまだ進んでいない地域もある中で、どのように進めていくのか考えている。地域の問題として教育についても取り上げ、子どもたちだけでなく、地域の人にとってもウェルビーイングとなるようにしていきたい。やっていく方が楽しむのが長続きさせていく上で重要。

感　文科省や総務省などが進めている事業は別々のものと捉えるのではなく、今あるものやどちらかにもう一つの視点を取り入れるなどをしていけば、最小限の努力で最大の効果を得られるのではないか。最終的に目指す方向は一緒のはず。

第 12 分散会

ファシリテーター　森脇　和夫
分散会記録者　　手塚　駿

町をつくるスペシャリストを集めた時間外の【町+人】づくり

なんぶサイカッツ　発表者　大塚　怜

なんぶサイカッツは鳥取県南部町で 15 人のメンバーで構成された組織である。活動実績としては、岐阜・石川研修を行ったり、地域向けにクリスマスイベントや地域ボランティア、子ども食堂を実施したりしている。高校生を巻き込んだ活動を実施しており、子どもたちと鯉のぼり作成をしたり、サイクリングの活動を実施したり桜餅を作成して共有したりしている。つながりを意識した取組を実施しており、地域の活性化を目指すための様々な活動をしている。様々な人が関わり合って、地域を巻き込んでより地域を良くしていこうとしている。

また、活動を通して自分達の成長につなげていこうとしている。児童館でクリスマスイベントを行ったり、ミニコントや南部町の魅力を伝える「南部町なんつークイズ大会」を行ったりした。一人一人が地域を育てていけるような社会の構築を目指していきたいと思い、活動を行っている。マルシェでは、町内外の 600 人以上に参加していただき、南部町を深く知ってもらうことができた。地域の企業から南部町に寄付をいただき、クイズ大会を開催することができた。人づくりは、活動の原動力になっていると感じる。南部町の中に新たなつながりの場を作り上げていくことが最終目標である。

訓練や学習会を開き、地域のリーダーとして子ども防災士を育てる

今治市防災士会　発表者　砂田　ひとみ

立花地区では、総合防災訓練やハロウィンパーティーなど年間を通じて様々なイベントを企画しており、小学校との関りが深く、高学年の防災出前授業は毎年依頼がある。子どもたちの防災意識は高いが単発で終わることが多い。継続した学びを地域でできないかと地区防災士が発案し、「立花こども防災士」育成を手掛けることに。災害時に守られる存在だけではなく、自ら学び・考えることができる力を磨いてほしいと、地区総合防災訓練に合わせて小学４年から６年生までの児童に募集をかけている。今年は 34 名。

その後、家の中の危険探しやクイズ、英語で避難誘導する寸劇など、楽しく面白く普段の暮らしに取り入れられる防災コンテンツを作成し、昼休みの小学校空き教室を学びの場として活動。認定された子ども防災士は次年度の防災訓練スタッフとなる。子ども防災士の活動案内や様子は保護者 LINE グループを作り共有している。子どもたちは防災の枠を超え、地域行事にも積極的に関わっており、地域の大人が刺激を受けている。

今後、中学校区内の小学校との連携を強化するなど地域全体で実践的で継続可能な防災意識を醸成し、子どもから大人まで安心安全な生活を送れるように努めたい。

愛媛大学教育学部学生による子どもの学びづくり・体づくり

久米わくわくチャレンジサタデー　発表者　石丸　千晴、濱野　有実香

久米わくわくチャレンジサタデーは、2005 年から松山市の久米公民館、久米小学校、愛媛大学が連携し行っている取組で、年に７回ほど、土曜の午前中に５、６年生約 35 名を対象に、15 名ほどの大学生が参加し、授業や人間関係づくり、遊びの各時間を企画・準備している。毎回の活動後には協議会を開き、主担当の学生が意図や評価を述べ、大学教員や久米小学校教員、地域の方々からの評価や助言を受けて、成長と学びを重ねている。今年度は、16 人の「わくチャレ」メンバーが、伝え合い、助け合い、学び合う子ども像を育てることを目指している。午前中を中心に、ワクワクゲーム、自由な授業、全体遊びなどを通じて、子どもたちの成長を支援している。準備に１ヶ月かけて授業を構築し、学生がチームとなって協力して学び合う環境を整えている。子どもたちの感想シートには、グループで楽しく活動できたことや学生との交流が刺激的だったことが書かれており、今後の活用法や教員としての考え方にも影響を与えている。わくチャレでの経験を通じて、子どもたちとの関わりを増やしたり、将来の教員としての役割を常に考えるようになったり、異なる学年間の交流を生かしていく考え方が育まれていると感じる。

【質疑応答】

＜町をつくるスペシャリストを集めた時間外の【町+人】づくり＞

Q　この活動における今後の目標などはあるか。

A　地域の祭りで米を使うポン菓子のようなものがあったが今はない。「パン」と大きな音を　たてお菓子を作るので、作る手順を見せ、児童館でお土産として渡したい。

Q　なぜこのような活動を始めたのか。

A　自分達のやりたいことを自分達のやりたいときにやるというリーダーの言葉にひかれた。

Q　鳥取県が大好きです。どのような地域を目指しているのか。

A　地域を盛り上げるためには、子どもが重要である。20 年後に地方のために貢献をしてほしい。理想は、みんなで楽しく過ごすことができたら良い。

Q　女性の参画の面も含めて、人を集めて規模を拡大していきたいと考えているか。

A　一人女性がいる。一緒にやりたい人を集めたい。

Q　どのようにメンバーを集めたのか。

A　施設の職員が多数おり、見に来てもらい一緒にやっていこうというスタンスで集めた。

Q　仕事をしている傍でこの活動をしていてすごい。予算面の苦労話などを教えてほしい。

A　行政職員は利益活動を一番としていない。南部町を盛り上げたい。

Q　どのような思い出ができたか。また、やっていて発見したことなどを教えてほしい。

A　やりがいが大きい。活動を通してでなければ関わらなかったであろう方との活動が楽しい。　交流が生まれるのは予想外であり、やってよかった。

Q　自費での活動が多いのか。

A　補助金を考えたが、今は自分達の費用で活動を維持している。

Q　定年はどうなのか。長期的な活動の先見性を伺いたい。

A　まだまだ若い団体であるが、制度として役職を振り分けている。今後の人事関係については　見通しが立っていない。

＜訓練や学習会を開き、地域のリーダーとして子ども防災士を育てる＞

Q　ライセンスカードの特別な作成方法はあるのか。

A　ラミネート加工するなど手作業している。

Q　認定試験を行った後に、ライセンスカードをもらった子どもたちの反応はどうだったか。

A　大変喜んでいた。友達に自慢していた。

Q　学校との関わりが多いと感じた。

A　毎月何かしらイベントを企画しているからか。防災士に馴染みがない子が多かった。

Q　このような活動を行っているのは、防災に関する経験値があるからなのか。

A　防災における危機意識を高めることが大切。西日本豪雨から教訓として学んだ。

Q　防災士の資格をとっておこうという土壌ができている。

A　子どもが参加すると家族が参加する。一人一人が防災意識をもてば、支援される側より支援者が増える。

Q　英語で伝えるよりジェスチャーが良いとのことだが、英語が通じる人との関わりが効果的では。

A　聴覚障がい者との学習会で、いざというときは手話よりジェスチャーが伝わりやすいとのことだった。

Q　言葉の範囲が広がって良いのではないか。

A　中学生なら英語で取り組めるかも。

Q　防災士の資格は何歳から取れるのか。

A　小学生ではフリガナなしの問題が読めないので難しいところがある。年齢の制限はなかったと思う。

＜わくわくチャレンジサタデー＞

Q　困難な場面に出会ったときにどのようにして乗り越えたか教えていただきたい。

A　できていないところを互いにフォローしながら、次につなげていこうとしていった。うまくいかなかったことを振り返り、次へと繋げていく大切さを学んだ。

A　去年は模擬授業がなかった。卒業した先輩が教員になり、授業を見てもらう機会がなかった　ため。失敗を減らすために、失敗を次へとつなげていく形をとっている。うまくいかなかったこともみんなで共有し合い、改善をしていく。

Q　教員になった先輩から教わった最近の様子の違い等、保護者から先生に対しての要望等はあ　ったか。

A　久米小学校にわくチャレの先輩がいる。変わった様子は聞かない。意欲的になった。子ども　同士のコミュニティが広がった。

A　マックシステムを使って保護者と連絡をとっている。保護者からの要望等もない。

Q　子どもと関わる上で、一番大切にしていることは。

A　寄り添う。心理的にも物理的にも寄り添う。普段からの関わりで気づく。子どもの目線に沿って話をする。

A　子どもが本当にしたいことや意欲を大切にしたい。積極的に話すことも大切。「初めまして」も多いので、より良い関係性を築いていくことを目指して頑張っている。

A　学校外で活動をされている方は、是非学校ができないことをぜひやってほしい。

Q　保護者も入れる状態にしてもいいのではないのか。親との関わりの機会も持てると良い。

Q　わくチャレ通信とはどういったものか。

A　写真とか活動内容を次の活動の時に保護者に共有をしている。

A　活動の１ヶ月前に次の役職を計画的に配置転換しながら行っている。授業者は二人を配置　し、教育実習に向けて行っている。
Q　５・６年生 30 人を対象に実施をしているのか。
A　集まった人数で実施している。
A　30 人までにしていたが、35 名の受け入れ体制を構築した。
A　継続の側面から大幅に受け入れた。
Q　児童の変化や心に残っていること。
A　わくチャレの活動を伝搬してくれていることで、少しずつ広まってきている様子。
A　参加必須ではないため行けないこともあるが、行けるときは行くようにしている。
Q　指導助言の先生は現職の先生？指導助言の先生が毎度変わっているのか。
A　毎回先生は変わる。制限はないため、連絡を取って来ていただいている
A　専科の先生に来ていただくことも多い。だいたい一人くらいのことが多い。バラエティに富んでいる。
A　大学教授の場合、事前に見ていただいてから当日も授業を見ていただいて、協議会にて指導助言をいただく形となっている。
A　私は街の学校の文化を仕組みとして持続させる可能性を考え、みんなで次世代育成を行い、全ての人が社会総がかりで行っていく必要があると感じる。それぞれ役目と強みが違うため、協力する体制が大切である。

＜全体を通しての意見感想等＞
○　おっさんの会を結成している。組織を存続させるためにでも、子どものみでなく、巡り巡って地域の活性化にも役立ちたい。
○　中学生に対して体験活動を実現する中で郷土愛を育てたい。高校生のキャリア教育にもつなげていきたい。私の地域ではコロナで学生を排斥することがあったが、平和学習を行ったり、探究の活動を行ったりした。
○　夏休みに小４の子どもたちと４泊５日で歩くという活動を実施している。地域活動がキーワードで、地域全体で育てる教育をめざしている。今年で 21 回目。今後も続けていきたい。子どもたちの成長を近くで見ることができるため、学生自身も成長できるし、子どもたちも成長できる良い機会となっていると感じる。
○　青少年の地域参画を目指した団体を立ち上げ、カードを作成して商品化し、コロナ禍でも活動ができるようにした。子どもたちの思いを形にすることが大切。
○　子ども防災士から世界が違って見える。防災とは、人のことを思うというところが含まれているということに気付いた。世界が違っていて、互いの違う分野をリスペクトすることが大切であると感じた。
○　防災双六や防災クエストを取り入れた活動がしたい。イラストや隠し芸。学校の廊下に貼るなどしたい。高齢の方との関わりを増やし、学校の先生を惹きつける関わりを行い、近い世代や若い人との関わりを増やしたい。
○　イベントで私に連絡していただければ。壁に募集の張り紙をしている。是非。
○　中学生は学業の割合が大きくなり、サポートする親の意識も変わってしまい、なかなか厳しい。小学校で育んできた地域との連携を失ってしまう。中学生も地域に入っていくことが必要だと感じる。
○　カリキュラムのどこに位置付けていくことができるかが大きな問題となってくる。中学校では特に負荷がかかる。

第 13 分散会

ファシリテーター　　隅田　直軌
分 散 会 記 録 者　　澤井　辰之

“ひと”と“ひと”とをつむぐことから生まれる教育やまちづくりをめざして

NPO 法人　ひとつむぎ　　発表者　中山　知華

「ひとつむぎ」は、2014 年 10 月に発足し、「ゆず収穫の手伝い」など地域のお手伝いから活動を始め、翌年 2 月に、継続的に活動するための資金運営等も考え、「特定非営利法人ひとつむぎ」として法人格を持つ団体となった。

主な活動として、「シラタマ活動」と「ローカルハイスクール」が挙げられた。シラタマ活動は、大学生が牟岐中学校とワークショップを行い、中学生の主体性や協調性、コミュニケーション能力、郷土愛を育んでいる。ローカルハイスクールは、町内に高校がない牟岐中学校の生徒のために、ひとつむぎなどの大学生・社会人のネットワークを合わせ、高校生の新たな学びの場を提供する活動である。しかし、最近では、新型コロナウイルス感染症のため、中学生や高校生と直接ふれあう機会が減少し、活動が困難な状態であった。そこで行っているのがオンラインで行う平和学習だ。コロナによって活動が制限されたり、修学旅行に行くことができなかったりして、平和学習ができない生徒のために、大学生が平和学習を行っている。

これから、アフターコロナを迎え、中学生との対話型ワークショップを開くなど、コロナ禍前の状態に少しずつ戻ってきている。しかし、一度中止になってしまったプログラムを立て直すことは難しい。今後、「地域住民・子どもに寄り添う」を大切に、コロナ禍で中止になった社会教育プログラムを再構築していくことも求められている。

地域の子どもたち対象「おうちにひとりでいるならちょっと話に」

みちくさこども食堂　　発表者　野間　千愛

現在、こども食堂は、全国で 7,000 カ所、愛媛県には 93 カ所と年々増加している。みちくさこども食堂は、松山市を中心に活動している食堂である。みちくさこども食堂では、地域の子ども（2 歳～中学生くらいまで）と保護者を対象に、毎週水曜日 16 時から 18 時までご飯の提供やイベントなどを行っている。場所は、居酒屋「みちくさ」に協力していただいている。食材は、フードドライブ（家庭で余っている食品を持ち寄り、食べ物を必要とする団体や施設に寄付をする活動）やフードバンク（食品企業の製造工程で発生する規格外品などを引き取り、福祉施設等へ無料で提供する活動）からの寄付や農家、八百屋などのご厚意によって提供いただいている。定期的に節分や七夕、もちつき、自然体験としてたけのこ掘りなどのイベントも行っている。

課題として、スタッフの継続的な確保が難しいこと、スタッフの共通理解をさらに深める必要があること、今まで以上に周囲の理解を得て連携していく必要があることなどが挙げられた。子どもたちの居場所づくりとなるよう、多方面の連携・協力が求められる。

双海町ジュニアリーダー会の活動

双海町ジュニアリーダー会　　発表者　中島　空・島　彩心琉

　双海町ジュニアリーダー会の活動として、小学生を参加対象とする「ふるさと体験塾」、「おもしろ大作戦」、「夕焼け村」が紹介された。

　ふるさと体験塾は、底引き網の体験やさつまいも掘り、ハイキング、もちつきなどの体験活動を行っている。おもしろ大作戦は、長期休暇等を利用し、じゃがいもを植えたり、天草からゼリーを作ったりする活動である。親子で参加することが多い。夕焼け村は、異年齢の子どもたちが 1 週間の共同生活を行い、学校へ通いながら炊事、洗濯等の日常生活を体験する活動である。

　小学生の頃に活動に参加して、活動を手伝いたいと思った中学生以上の生徒がジュニアリーダーとなり、双海町こども教室のボランティアスタッフとして活動している。自分たちがお世話になった活動で、今度は自分たちが運営側に立ち、恩返しをすることを目的に活動している。活動の中で、双海町のために私たちができることはないかと考えるようになった。こうした活動が評価され、日本ボランティア学習協会が主催するアレックディクソン賞を受賞した。

　活動の課題として、まず、プログラムのマンネリ化が挙げられた。内容が毎年同じになっているため、今後は変化に取り組んでいきたい。また、ジュニアリーダー会の継続化についてもふれた。現在は 43 名の会員がいるが、全員が継続していくわけではない。そのため、ジュニアリーダーがどのような経緯で生まれ、どのような目的で活動していくのかを全員で共有し、一人一人がジュニアリーダーとしての自覚を持つことが重要だと考える。ジュニアリーダー会がアイデアを出し、双海の魅力を伝え、双海を活性化していきたい。

【質疑応答】

＜NPO法人　ひとつむぎ＞

Q　ひとつむぎのメンバー構成について教えてほしい。

A　徳島市内の大学や鳴門教育大学をメインに大学生が 7 名程度いる。大学生以外は OB などがアドバイザーとして在籍している。

Q　大学生の人数確保はどのように行っているのか。

A　合同説明会や他の団体の活動などで紹介している。興味をもった人が来てくれることもある。ＳＮＳだけでは難しい。

Q　イベントは何回くらい行っているのか。

A　3 ヶ月に 2 回くらい行っている。PR イベントとしてキッチンカーを出したり、セミナーを開いたりもしている。

Q　活動の拠点はどこですか。

A　主に市内の事務所で活動している。打ち合わせは ZOOM でミーティングを行っている。

Q　シラタマ活動の活動時間はどれくらいか。

A　土曜日の午後に活動をしている。

＜みちくさこども食堂＞

Q　どうしてこの営業時間になっているのか。

A　居酒屋の場所を借りているため、その兼ね合いがある。

Q　人数はどれくらいまで利用できるのか。また、とびこみでの利用は可能か。

Ａ　人数は 50～60 人まで。それ以上は提供できない。予約制ではないので利用することはできる。
Ｑ　場所を借りているということだが、リスクについてはどう考えているのか。
Ａ　何かあった場合、居酒屋の衛生管理者がおり、許可を得ている。しかし、店舗に協力していただいているので、リスクマネジメントについては常に考えておかなければならない。
Ｑ　学校などとの連携はあるのか。
Ａ　校長先生などと関わることがある。
Ｑ　運営は大変ではないか。
Ａ　利用する方から 1 人 100 円いただいているが、赤字である。足りない部分は寄付で補っている。
感　バイタリティがすごいと感じた。運営面で、ボランティア活動などを行っている学生団体や地域の方と連携していくのもよいと思う。自然体験の活動もあり、食育につながる部分もあってよい活動だと考える。

＜双海町ジュニアリーダー会＞

Ｑ　メンバーは全員双海町在住の人か。
Ａ　全員ではない。中には長期休暇などを利用して参加する人もいる。
Ｑ　今後、人口が減少していくなかで、どのように活動を継続していくか。
Ａ　参加者は減ってきている。子どもたちも少なくなっている。ベンチ作りなどの活動にも力を入れていきたい。
Ｑ　卒業を機に双海町から離れてしまうのではないか。地元に戻ってくる子はいるか。
Ａ　双海町には高校がないため、高校は双海町外へ行くことになり、ジュニアリーダーから遠ざかってしまうと考えられる。しかし、就職してからジュニアリーダーの応援に来てくれる子もいる。
Ｑ　マンネリ化している活動をどのように改善しているか教えてほしい。
Ａ　プログラムの主となる部分はそのままにし、少しずつ改善していくようにしている。例えば、段ボールハウスを作り宿泊する行事で、防災に関わる内容を加えた。
Ｑ　活動について相談する相手はいるのか。
Ａ　公民館や地域の方が相談にのってくれる。ほとんどは学生が考えている。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　NPO 法人ひとつむぎ以外の活動について、牟岐キャリアサポートという活動をしている。例えば、地域実習をする学生のサポートや、牟岐町内で企画してみたいと考える学生のサポートなどを行っている。牟岐町は、外から来ている学生たちへの働きかけを行っているため、その点は双海町とは異なる点である。
○　子どもたちが地域に戻ってくるということについて、必ずしも地元でないといけないという意識はない。その地域に魅力を感じ、やってきてくれるのならばよいのではないだろうか。牟岐町では、牟岐町に戻ってくることは絶対ではない。外に出て働くことは肯定的である。
○　子ども食堂が最近増えているが、やればよいという感覚になっているのではないだろうか。数だけ増やすのではなく、本来の趣旨を考えないといけないと思う。また、学校など様々な団体と協力していくことが必要だと感じる。

第 14 分散会

ファシリテーター　本田 精志
分 散 会 記 録 者　松本 拓海

若者のキャリア形成を支える教育の土壌をつくる

NPO 法人 だっぴ 発表者 森分 志学

NPO 法人だっぴは、「若者の可能性と実現力の開拓」をミッションに若者と大人がつながる場づくりを行っている。中高生・大学生・大人の対話プログラム「中学校・高校生だっぴ」は、三者がフラットな関係での対話を通して、お互いの経験や価値観などを共有するプログラムである。普段出会わない人たちとの対話から中高生の自尊心や将来の選択につながる発見で学びを生んでいる。

「生き方百科」では、大人の生き方から進路の探求をしている。岡山の大人に大学生がインタビューを行い、その生き方や働き方を、考え方を Web 記事にまとめて、生き方のいちロールモデルとして、中高生や大学生に発信をしている。

「放課後キャリア探求」では、高校生たちが色んな人と交流する中で自分の話を受け取ってもらったり、大人から新たな気付きをもらったりして、自己理解や社会理解につながる発見を得る活動を行っている。また、高等学校の総合的な探求の時間のキャリア教育のカリキュラム作成の支援を行ったり、岡山の大学と連携して、起業家になりたい子どもの支援を行ったりしている。

体験活動や学力支援に取り組むフリースクール、子どもの居場所

スクノマの会（不登校対策サポートチーム） 発表者 小笠原 忠彦

新居浜市でも、不登校児童生徒が年々増加傾向にある。スクノマの会は、令和３年４月に新居浜市 PTA 連合役員が中心となって、不登校支援を目的に立ち上げた会である。当初は、活動する拠点がなかったものの、令和４年度に、活動拠点を瀬戸会館に置いた。令和５年度からは、愛媛県人権対策協議会新居浜支部の支援を受けて、「教育支援事業」を進めている。「教育支援事業」は、学校生活に不安を抱いている児童生徒、その保護者の支援を目的に、保護者支援、個別学習支援、スクールサポート教室を開催している。保護者支援では、LINE を用いた個別相談会や保護者会を行っている。個別学習支援では、主に児童生徒の学習を支援している。個々の児童生徒の状態をよく見て、学校とも連携しながら、学校の進度に合わせながら学習支援を行うこともある。スクールサポート教室では、イチゴ狩りや芋掘りなどの体験活動を行っている。スタッフは、１６名おり、市の PTA 連合会の役員や教職経験者、人権対策協議会の役員等が中心となり、運営等を協議して取り組みを進めている。

教会の牧師が中心となって地域住民を巻き込んだ子ども食堂

教会子ども食堂　発表者　森分　望

２０１９年１月に子ども食堂が開店した。きっかけは、赴任した教会周辺の環境である。高齢者の孤独、地域コミュニティの希薄化、シングルマザーや子どもたちの貧困等の問題があり、温かくホッとできる関わりの場になりたいと思い、子ども食堂を始めた。１回の実施で１００人程度の参加がある。子ども食堂だが、子どもだけなく高齢者も対象である。

同じ地域で子ども食堂を行うお寺の住職と協力して、フードバンクの活動も行っている。地域企業の協力や社会福祉協議会等との連携により、３年間で、３０の子ども食堂・２０の福祉団体へ食品を提供する活動になった。食品を通してできた繋がりは、子ども食堂ネットワークに発展した。困窮者支援のコミュニティパントリーは、食支援を行うみんなの居場所になった。コロナ禍以降は、大学生の貧困も救いたいという思いで大学との連携活動も行っている。

【質疑応答】

＜NPO 法人　だっぴ＞

Ｑ　運営のお金はどうしているのか。

Ａ　ほとんどが行政からの委託事業である。１割が寄付金になっている。大学の広報の予算をつけてもらったこともある。また、NPO の助成金や行政からの助成金をもらっている。

Ｑ　学校側はどれくらい受け入れているのか。

Ａ　単発のプログラムは受け入れてもらいやすい。高等学校は、カリキュラムの支援等も行っている。中学校の総合的な学習の時間のカリキュラム作成に関わりたい思いはあるが、あまり実現できていない。

Ｑ　スタッフの人数や勤務体系話をする大人のネットワークはどれくらいあるのか。

Ａ　常勤のスタッフはいない。１０人程度である。大人のリストは。３００人くらいいる。毎回の活動のときにアンケートをとり、取材していいか聞いている。

Ａ　行政から委託事業を受けるためのアプローチはあるのか。

Ｑ　経緯としては、岡山市の事業で３年間行った。その後、予算は付かなかったが、岡山市以外の周辺自治体から声をかけてもらうこともあった。

Ｑ　寄付金はどれくらいあるのか。

Ａ　令和４年度は、約１９６万円。プログラムの後に寄付をお願いしている。優秀な人材を確保したいという思いがあるのか法人の方が寄付をしてくれる。

＜スクノマの会（不登校対策サポートチーム）＞

Ｑ　学校との連携はどうしているのか。義務教育以降の支援はどうしているのか。

Ａ　学校との連携としては。担任の先生へ LINE を送っている。学校の作品作りなどをスクノマの会で行っている。また、支援会議にも出席をするときもある。学校との関係は切らないようにしている。一人高校生がいるが、時々やってくる。いつまでもつながれるようにしたいと考えている。

Ｑ　PTA からスクノマの会になった理由はあるのか。

Ａ　子どもの卒業の関係で PTA が最後の年に、新居浜の不登校の子のために居場所を作りたかった。５

人程度賛同してくれた。人が変わったらできなくなることも多いが、次の代の人ができるような仕組みを作ることも大事だと考えている。

Ｑ　子どもたちにどのようにケアをしているのか。

Ａ　もう卒業した高校生には、学校の話等は聞いていない。スクノマの会でゲームをして学校へと行ったが、ゲームはいけないなども伝えていない。褒めることを心掛けている。長期のケアが必要な子に対しては、時間内にやりたいことをやっている。人との出会いが大切だと考えている。

感　管理の厳しい学校はしんどくて学校へいけないときがあった。受け入れる場所があるのがいいと思った。

＜教会子ども食堂＞

Ｑ　ターゲットへのアプローチはどんなことをしているか。

Ａ　LINE 等で周知している。子ども食堂は、制限等はなく、誰でも受け入れている。

Ｑ　本当に届けないといけない困窮者の人たちに届けられていないということはあるのか。

Ａ　活動は２年半行っている。１年で約４０トンの食品で、企業が SDGｓとして支援してくれている。人によって困っていることも違うので、本当の支援を必要としている人たちにできているかというところまでは考えられていない。

Ｑ　運営資金はどうしているのか。

Ａ　助成金と寄付金が多い。

感　高校の時に子ども食堂が月に２回あった。私も行って子どもたちと一緒にうどんづくりをしていた。一緒に遊んでいた子どもは喜んで帰ってくれた。他の子達も楽しめる食堂がいいなと思った。

感　今治で住んでいる校区では、地域柄不登校も多い。学校で月曜日の朝７時から子ども食堂をやっている。学校でやれば、子どもたちに声をかけやすい。地域で大人と子どもが接する場面を作ることが大切だと思う。

＜全体を通しての意見感想等＞

○　子ども食堂はしたくないけど、食材はいただきたいと思っている。理由としては、食材をもらって自分で調理ができる子どもを育てたいと考えている。

○　横のネットワークが必要だと考えている。

○　地域教育は、力を入れてやっている人が抜けると活動が廃れるときもあると思う。

○　コロナ禍以降 PTA 活動が出来てないように感じる。一人一役をしたくないっていう保護者も多くなっている。

○　地域のコミュニティが低下しているところもある。お祭りもコロナ禍以降人数が足りずに出来ていない地域もある。

○　語彙が少ない子どもたちが多いが、いろいろ大人と関わっていったり、感動体験等があったりすれば、言葉遣い等も変わってくるのではないかと思う。

○　自分が地域に関わっていくことが必要だなと感じた。

第 15 分散会

ファシリテーター　　崎須賀　悠
分 散 会 記 録 者　　宇津　博美

無人島チャレンジ実行委員会

無人島チャレンジ実行委員会　　発表者　善家　瑛徳・橋本　泰志

この事業は、夏休みに県内各地から集まった小中学生が愛媛県宇和島市沖の無人島「御五神島」で一週間の無人島生活をするというもので、今年は 33 回目を迎えた。今年度は募集人数を減らすなどの工夫をして 4 年ぶりに開催した。この無人島は、かつて有人島だったが、今は電気も水道も水洗トイレもない。「不便」「不足」「不自由」という「三不」の中で集団生活を送る。

今年度は、7 月 30 日から 8 月 8 日の 10 日間で実施した。まず、国立大洲青少年交流の家と下灘公民館にて、火の起こし方やタープの立て方を学んだり、班旗や竹食器を作ったりした。入島日は、バケツリレーで荷物を運んだ。島では、井戸水でお風呂に入ったり、決められた食料の中で食事を作ったりして生活した。自給自足の日は、山菜や魚、バッタ等を調理して食べた。今回は、台風の影響で予定より早く離島した。離島後は、国立大洲青少年交流の家にて、無人島で学んだことを生かしながらキャンプを行った。

この事業では、アンケート調査を行った。その結果、生きる力、リーダーシップどちらにおいても、多くの項目で減少傾向にあった。しかし、身体能力（体力、気力）と集団内の人間関係を円滑にしようとする力は、向上していた。例年と比べ、事前調査の結果が高かったからだと考える。事業に参加し、自分の能力の実際に気付いたと思われる。また、台風の影響により、困難を乗り越える日数が少なかったことも原因の一つと考える。自由記述から「過ごしてみると、甘くはなかった。」「困難を乗り越えることで、ありがたさを学んだ。」「協力する大切さを学んだ。」「お母さんいつもありがとう。」等、参加者が多くのことを学んだと分かった。また、スタッフとして参加した大学生は、トラブルの対応の仕方や長い目で子どもを見ることの大切さ、待つことで子どもたちが変わっていくこと、リスクマネジメント、多くの大人や子どもの前で話す機会が多く度胸がついた等、学級経営に生かせるスキルを身に付けることができた。また、生きることをテーマにした体験活動は人を変えるということを学んだ。この事業を通して、子どもたちに、自立心や感謝、思いやり、協力等、様々なことを育むことができると思った。

科学実験教室

愛媛県立松山工業高等学校工業化学同好会　　発表者　酒井　真　　西森　実咲

私たちの学校では、一年生から実習実験の授業があり、学んだことを実験によって確かめていくことは非常に楽しく、この学校に入学して良かったと感じる瞬間でもあった。しかし、授業担当の先生から子どもたちの理科離れの話を聞き、もったいないと思った。そこで、子どもたちにもっと理系分野のおもしろさを伝えるにはどうしたら良いのか考えるようになった。そんなとき、さくら児童クラブの谷川さんと出会い、実験教室をやらせてもらえないか相談した。さくら児童クラブの先生と打ち合わせを重ねる中で、「実験の成功よりも、子どもたちが主体的に楽しむ力や試したい思いなどを大切にする活動にしたい」と考えるようになった。児童クラブの方と協力しながら実施した実験教室を紹介する。

今年度、6月 10 日に「第１回　スライム作り」を実施した。まず、自己紹介や名札作り等をした。実験用眼鏡の着用をして、子どもたちに実験の雰囲気を味わってもらう工夫もした。活動では、子どもたちとの会話を大切にした。大学生が子どもたちのサポートをしながら、高校生ものびのびと活動できるように支援してくれたため、安心して活動することができた。アンケート結果から、実験教室の後、理科が苦手な児童が減ったことが分かった。少しでも理科の楽しさが伝わっていることを実感できて嬉しかった。この活動を通して、もっと生活に身近で盛り上がるような実験はないか調べ、同好会のメンバーで話し合った。そして、7月 26 日に「第２回　噴火実験・見えないインク実験」を実施した。実験が成功するために時間を掛けて準備した。しかし、当日の実験はどちらもうまくいかなかった。それでも、子どもたちは、私たちの頑張っている姿を見て、「楽しかった」「夏休みの自由研究をこれにする」と言ってくれ、とても良い実験教室になったと思う。

これらの活動を通して、子どもたち一人一人の主体性が高まったと感じている。また、周りの方が陰で応援したりサポートしてくれたりして、自分たちも手応えを感じながら楽しめた。今後は、この活動を自分の母校の児童クラブでもやってみたいと思っている。

今後の目標は、今までの活動や今日出会った方とのつながりを大切にし、継続的な活動にしていきたい。また自分たちも化学の知識をもっと深め化学を楽しみたいと思う。

いよし百冊物語

いよ本プロジェクト運営委員会　　発表者　岡田　有利子

私たちは、紹介型読書会や古本交換会の開催、私設図書館の運営を通して、「本」と「人」をつなぎ、「本」を通して「人」と「人」をつなげることを目的に活動している。なぜなら、「本」は「人」を近くし、「人」は「本」を近くすると思うからだ。

今年度は、伊予市に住む人や関わる人に好きな本を一冊紹介してもらう、「いよし百冊物語」という冊子を作成した。この事業は、地域活性化センターの応援事業に採択され、伊予市の補助金を活用して行っている。この冊子には、115 人の方に協力してもらった。紹介している本は、全部で 105 冊。中には、同じ本を紹介した人が２人、同じ作家の本を紹介した人が３人いた。また、文章で紹介した人が 93 人、インタビューに答えた人が９人、絵で描いた人が２人、Ｑ＆Ａに答えた人が１人いた。この冊子作製の特徴は２つある。１つ目は、伊予市内にある６つの公民館全てでイベントをしたことだ。２つ目は、全世代（１歳～80 歳代）の方に主体的に参加してもらったことだ。そして、この冊子は、11 月に完成した。これから２月に掛けて、冊子に出てくる本を全てそろえ、各地域を巡る「お披露目交流会」を開催していく予定だ。この冊子は、本や人に注目することで、深まりが出てくると思う。出版して終わりではなく、その後の使い方次第でつながる、ひろがる事業になっていくと思う。好きな本を選ぶことは、自分自身の人生を見つめ直したり、振り返ったりすることにつながる。それにより、人という地域資源を可視化させる。そして、世代を超えた人とのつながりを生む。その交流から地域活性化につながっていくと考えている。この冊子を読むことで、読みたい本ができたり、話してみたい人ができたりすると良いなと思う。また、自分なら何を選ぶか考えてほしい。「本」と「人」との相乗効果で人々の豊かな人生を応援したいと思っている。それは、人こそが財産だと考

えるからだ。人が生き生きとし、一人一人がきらめくことで地域は維持され活性化されるのだと思う。私たちの活動は、読書推進が目的ではなく、読書は人が幸せになるための手段であり、人が幸せになることを目的としたい。発行後の反響として、「これを読んでいたら知り合いがたくさん出ているので面白い」「本は苦手だけど、知り合いが出ていると読みたくなるなあ」「自分なら何を選ぶか考える」などの声を聞いた。115 人の物語は伊予市の物語でもあり、この冊子を読むことで、ますます伊予市を好きになっているはずだと思う。これが新たな本に出会うだけでなく、伊予市に住む人の魅力に気付いたり、自分自身を振り返ったりする、種のような冊子になることを願っている。

【質疑応答】

＜無人島チャレンジ実行委員会＞

Q　学生のスキル up のための準備とは？

A　事前に島へ入島して、安全面について研修している。

Q　４年ぶりの開催で経験者が少ない中、努力したことは何か？

A　教員や学生に向けた事前研修会を行った。参加児童・生徒数の募集人数をこれまでより減らしたり、教員の募集の仕方を変えたりした。ただし、４年ぶりとなると、ノウハウの継承は難しかった。教員は 10 日間の事業に全日参加となるため、そもそも参加が難しいところはあるが、順番に受け継いでいけるように努力した。

Q　指導班と運営班以外にどんな班があるのか？どんな仕事をしているのか？

A　食事係：食事を作ったり、子どもたちに料理の仕方を教えたりする。
　　資材班：裏方で荷物を運ぶ。他にも、いろいろな仕事を分担している。

感　子どもは、大人が裏で動いていることに最初は気付かない。でも、数日経つと大人のおかげで、自分たちが体験できることに気付く。そこから感謝の気持ちが生まれるので、とても良い事業だと思う。

＜愛媛県立松山工業高等学校工業化学同好会＞

Q　活動の実態を教えてほしい。

A　１回目：子どもが 20～30 人程度（低学年多め）　高校生スタッフが７人
　　２回目：子どもが 24 人（高学年多め）　高校生スタッフが６人

Q　反省点を踏まえた上での今後の目標は？

A　１回目：時間が長かった。失敗したときの時間の工夫が必要。
　　２回目：実験がうまくいっていない。失敗したときの内容の工夫が必要。

Q　主体的をどのようにとらえていたのか？失敗したことで得たことはなにか？

A　主体的は、「参加したい！やってみたい！」と子どもたち自身が思うこととととらえていた。失敗を通して、臨機応変に対応する力が身に付いた。

Q　担当側として活動してみてどうだった？

A　１回目のスライム作りは、子どもたちがいつもと違う活動だったので、楽しんでいる様子に見えた。
　　２回目は、「実験は残念だったけど、楽しかった。」という感想を聞いた。

Q　今後、この事業はどうなってほしい？

A　今後も、子どもたちに理科を好きになってほしい、理科の楽しさを伝えていきたいを目標に活動していってほしい。

感　行動力がすごい。理科離れを知り、実行したことがすばらしい。

感　子どもたちが主体的に動くための工夫がすごい。

感　出前授業で大学生から小学生はよくあるが、高校生から小学生はすごい。

＜いよ本プロジェクト運営委員会＞

Ｑ　一番困ったことは何か？

Ａ　スケジュール調整が大変だった。予算が通ってから事業スタートだったため、７月スタートで 11 月発行となった。今は、このスピード感で進めることができて良かったと思っている。

Ｑ　次の活動は？

Ａ　第二弾を作りたいが、ゆっくり時間を掛けて作っていきたい。人を広げたり、つなげたりするなど、もっと第一弾を生かしたい。

Ｑ　この活動をすることになったきっかけは？

Ａ　図書館で働いていて、多くの本だけでなく、多くの人に出会った。どの人もおもしろい人ばかりだった。そこで、本と人をつなぐいよ本プロジェクトをしようと思った。

Ｑ　本を読まない人に興味を持ってもらうための手立てとは？

Ａ　①古本交換会を産直市でやる。（産直市なら、いろいろな人が来る。そのような場へ、こちらから出向くことが大切だと思うから。）

②本を読む人もいれば、本を見る人もいる。本は、五感で楽しむものだから、それも良いことを知ってもらう。（読書の堅苦しいイメージを変えて、読書のハードルを低くしたい。）

③「ひたすら読書会」という黙々と読む時間を設定する。（事前に読んでなくてもここで気楽に読んでもらえる時間を作りたいから。１人でなく言葉を交わしながら読むことも励みになる。）

＜全体を通しての感想等＞テーマ「つながり」

○　地方で育った子どもたちが地元を出ていく傾向にある。地元にある仕事を知ってから出ていくといいと思う。そのために、コミスクと職場体験がつながったキャリア教育が進むといいなと思った。

○　愛媛県の社会教育課のＨＰに企業が掲載されている。企業側は、学校とつながり、地域の子どもたちに働いてもらいたいと思っている。上手につなげていきたい。

○　化学実験教室から演奏会の話につながった。１つのつながりがどんどんつながっていき、数ヶ月後、数年後にもっとつながっていくことを考えると、わくわくする。

○　「またやりたい」と思ってくれる子どもを育てたいという言葉が印象的だった。

○　「こんな大人になりたい」という気持ちは、地域の活性化につながる。

○　学生時代から自分たちの地域のために貢献することを考える時代になってきていて、とても頼もしい。心強い。

○　高校生や大学生が熱い思いを持っている。周りの大人たちがどうサポートしていくかが大事になると思う。